
旅人・双馬

しーれん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旅人・双馬

【Nコード】

N2428M

【作者名】

しーれん

【あらすじ】

死都ミュロンドへ向かうラムザ一団、アジョラを倒し、アルマの救出に成功する。しかし、脱出に失敗した転生者である双馬、その先に待ち受けるものとは…。

（注意）この作品は作者の自己満足で執筆されています。そういった物が苦手な方は戻るボタンでお戻りください。そう

プロローグ（前書き）

初めましてしーれんです。

初作品になりますが、完全な自己満足の小説です。

転生・チート・オリジナル主人公が含まれているため、
苦手な方は戻るボタンでお戻りください。

プロローグ

Side：ラムザ

此処は飛空艇の上か？

出入口である魔方陣の上から周りを見渡し、
アジヨラの側に倒れているアルマを見つけ叫ぶ。

「アジヨラ！ アルマを返して貰う！」

僕がそう告げると、アジヨラはこちらに振り向き殺気を放つ。

「来た力、愚かなる者共ヨ。」

私の復活を妨げるつもりであろうがそうはさせヌ！
出でヨ、我がシモベどもヨ！」

アジヨラの呼びかけと共に、
アルケオデーモンが召喚され、僕達に大拳して押し寄せる。

「ラムザ、俺がアジヨラに一撃を見舞う。
その隙にアルマを助ける。いいな？」

僕が頷くと、双馬そつばは次々と幻獣を召喚する。

『夜闇の翼の竜よ、怒れしは我と共に
胸中に眠る星の火を！ バハムート！』

『漆黒の光閃き、大気の震えとなれ』

斬鉄剣！ オーデイン！』

「バハムート、オーデイン。頼むぞ」

「「御意！」」

双馬の言葉にバハムートとオーデインが応える。

バハムートがメガフレアを放射し、その後をオーデインが駆け抜けた。

メガフレアによりアルケオデーモンが吹き飛ばされ、辛うじて耐える者はオーデインが斬鉄剣で斬り捨てていく。

「斬・鉄・剣！」

オーデインがアジヨラに一撃必殺を見舞う。

《ギーン！》

鈍い音と共に斬鉄剣を防ぐが、強力な一撃によりアジヨラの体勢が崩れる。

「乱れ…斬り…！」

双馬は立て直す猶予を与えず、鬼神の如き速さで斬りかかった。アジヨラは右腕が斬り落とされ、小さく呻く。

オーデインがその隙を見逃さず、さらに斬撃を加えていく。

「ぐううウ！ 幻獣如きガ、舐めるナ！」

『渦なす生命の色、七つの扉開き

力の塔の天に到らん！ アルテマ！』

巨大な魔力の塊が爆発を起こす。

オーデインは衝撃に耐え切れず、飛空挺の端まで吹き飛ば。

アジヨラは右肩を押さえ、呻きながら双馬を睨む。

「ハア…、ハア…、

そう力…、貴様達はかつて我を倒した者の末裔力！

負けヌ！ 我は負けヌ！ 貴様達を滅ぼシ、我が復活の糧にしてくれル！」

その隙に僕はアルマを抱え、出口に駆け出す。

それ同時に小さく吐く息が聞こえた…。

「貫^{つらぬ}け…、月影流^{つきかげりゅう} 瞬^{しゅん}・雷^{らい}！」

S i d e : O u t

S i d e : 双馬

アジヨラが右肩を押さえ、俺に殺気を放ってくる。
殺気をもともせず、次の手を考える。

ラムザがアルマを抱え、出口へ向かうのを横目で確認し、
刀の切先をアジヨラに構え、小さく息を吐く。

「貫^{つらぬ}け…、月影流^{つきかげりゅう} 瞬^{しゅん}・雷^{らい}！」

言葉を発すると同時に、俺の刀がアジヨラの心臓を貫いた。
刺さったままの刀を手放し、次の手の為に距離を取る。

「灰燼^{かいじん}と化^かせ…！」

『赤き五月雨に地を染める
火喰い刀！ 塵地螺鈿^{ちりじろでんかざりつるぎ}飾剣！』

終わりの言葉を告げ、刀の力を引き出す。

「ぐおおおおオオ…！」

塵地螺鈿^{ちりじろでんかざりつるぎ}飾剣が砕け散り、紅蓮の炎がアジヨラを包み込む。

「馬鹿…ナ…」

倒されるとは思わず出た言葉、
アジヨラは崩れ落ち、そして燃え尽きた……。

「終わったか…、戻れバハムート、オーデイン！」

「「御意^{ごい}」」

傷ついたオーデインと共に、バハムートが俺の中へと戻る。

「双馬、地上へ戻ろう!」

「ああ、シド達が待っている」

その言葉を返すと、飛空艇が崩壊し始める。

急いで駆け出すが…、俺とラムザの間に巨大な岩が降り注ぐ。

「くっ、双馬!」

「ラムザ、先に行け」

「しかし!」

「自分の妹まで巻き込む気か?

さっさと行くんだ。俺は必ず戻る」

俺はラムザ達の脱出と同時に、

出口が岩により塞がれるのを見届け、その場に座り込む。

「幾度^{いくたび}の転生を重ねようとも、物語の終焉^{しゅうえん}に死ぬるは己が運命…。
是非に及ばず…、か」

『慈悲に満ちた大地よ、つなぎとめる

手を緩めたまえ… レビテト』

^{レヴィテト}浮遊魔法を唱える。

足場が崩れ、徐々に落下を始める。

「さて、出口は何処か…」

辞世の句を詠むが、死ぬつもりなどさらさら無い。

地上へと繋がる出口が無いか探しながら落下して行く。

S i d e : O u t

……。
緩やかに落下して行く…、何処までも深く…深く

何処まで落ちただろうか？

そう考えていた矢先に、それは突如発生した。

鏡のようなモノが双馬の真下に広がり、中から多量の手が伸びてくる。

「避けられんな…」

呟きながら鏡を睨みつけるが、成す術も無く双馬は引きずり込まれた…。

ブローグ（後書き）

ブローグですが、読んでいただきありがとうございます。

一話目 契約（前書き）

タバサメインになりますゆえ、ルイズ・才人の描写が少なくなっています。

ご了承の上、お読み頂けると助かります。

一話目 契約

S i d e : タバサ

『我が名はタバサ。五つの力を司るペンタゴン。
私の運命に従いし、使い魔を召還せよ』

サモン・サーヴァントを唱え終わると、召喚のゲートが開かれる。
ゲートから風竜が現れ、周りから歓声が聞こえる。

『我が名はタバサ。五つの力を司るペンタゴン。
この者に祝福を与え、私の使い魔となせ』

私は風竜に近づきコントラクト・サーヴァントを唱え、口付けを
する。

そして、ルーンが刻まれると同時に、ゲートから爆発が起きた…。

「え？」

突然の事に驚き、咄嗟に杖をゲートが在った場所へ向けて構える。
煙が晴れるとゲートは消え、変わりに男が立っていた……。

見たことない服を着ている…、腰に差しているのは鞘？ 肝心の
剣は？

私は興味を惹かれ、男に近づいて行つた。

S i d e : O u t

Side：双馬

鏡に吸い込まれ、気が付けば学校のような場所に俺は立っていた…。

ここはどこだ？ イヴアリースにこんな場所はなかった筈だ。周りを見渡せば黒いローブを纏った少年・少女達が、俺のほうを向いている。

一人だけ年齢が突出した男がいるが…、あれは教師か…？

「何者？」

青い髪の少女が杖を構えたまま、俺に話しかけてきた。少女はそれなりに場数を踏んでいるのだろう、構えに隙がない。

「人に名を「タバサ」前に…、ふう。

俺の名は月影^{つきかげ} 双馬^{そうま}、傭兵だ。これで満足か？」

半ば呆れながら自分の名前を名乗る。
しかし、タバサと名乗る少女は俺に対して杖を構えたまま、殺気を放っている。

「何時まで杖を構えてるつもりだ？
戦いがお望みなら…、受けて立とう」

言い終わると同時にタバサを睨みつけ、殺気を放つ。

「ッ！」

「ミス・タバサ！ その男から離れなさい！」

先ほどの教師と思われる男が杖を構え、俺に向かって走ってくる。肝心のタバサは足が震えて動けないのか、その場に座り込んでしまった。

俺は殺気を放つのをやめ、教師のほうに振り返る。

「タバサ！」

赤毛の少女が座り込んだタバサに駆け寄る。友人か？
しかし今の俺には関係ない、それよりも…、

「聞きたいことがある。先も名乗ったが、俺の名は月影^{つきかげ}双馬^{そつま}、ソウマと呼んでくれ。
それよりここは何処だ？」

「え？ あああ、私の名前はコルベール。
ここトリステインの魔法学院で教師をしています」

「トリステイン？ イヴァリースにそんな地名はなかったと思うが…」

「トリステインを知らない！？ それにイヴァリース…、ですか…？
ミスタ・ソウマ、貴方は何処からきたのですか？」

敵意がないと判断したのか、警戒を解き俺に質問してくるコルベール。

イヴァリースでないとすれば、やはり異世界か…面倒だな…。

「イヴァリースという世界から来た。

いや、来たというより、連れて来られたという表現の方が正しいな。

突然現れた鏡に吸い込まれてね…」

「鏡…？ ああ、それはサモン・サーヴァントによって出現したゲートですな…」。

つまり、貴方はミス タバサに使い魔として召喚されたのです！」

「使い魔として召喚…？ 召喚が存在するなら帰す方法はあるのか？」

「いえ、召喚する魔法はありますが、残念ながら帰す魔法は存在しないのです。」

始祖ブリミルが現れてから六千年経ちますが、
使い魔を帰す魔法が存在した、という情報はありません」

ため息しか出ないな…。帰れないとなると、デジョンで次元の狭間に行くか…？

しかし、出口が見つかるとは限らない、最後の手段だな…。

俺はタバサのほうへ振り返る。

「タバサ、君の使い魔になろう」

「えっ？」

驚きの声を上げる赤毛の少女、それに同意するかのようにタバサは応える。

「…何を考えてる？」

「場所は異世界、地理も知らない、衣食住の保障もない、その上帰れない。」

しかし、使い魔になれば衣食住は保障される。 君ならどうする？」

タバサは無言でうつむく。 選択肢など最初から一つしかない、わかりきっていた事だ。

俺はうつむくタバサに対して言葉を続ける。

「ただ、元居た場所に帰るのを諦めてはいない。 戻る手段が見つかればすぐに帰らせてもらう」

「わかった…、契約する…。 屈んで」

「ああ」

タバサは俺に近寄ると、なにやら魔法を詠唱する。

『我が名はタバサ。 五つの力を司るペンタゴン。 この者に祝福を与え、我の使い魔となせ』

詠唱が終わると同時に、俺にキスをした…。

突然両手から痛みが走る、が耐えられないほどでもない。

「さて、どこかゆっくり話せる場所に移動しよう」

痛みは治まってないが、移動を提案する。

奇異の目で見られ続けるような場所に長居をしたくない。

「じつち…」

俺はタバサの後を追いつき、歩きながらキュルケという赤毛の少女と

自己紹介をした。

途中、後ろから爆発音が聞こえたのは気のせいだろう…。

Side: Out

Side: ルイズ

何度も失敗を重ね、ついに召喚に成功したと思った…

「あんた誰よ？」

先ほどタバサが召喚した男と違い、なんとも頼り無さそうな少年がそこに居た。

「ミスタ・コルベール！ もう一度やらせてください！」

「残念だがそれは認められない。 ミス・ヴァリエール、儀式は神聖なものだ。」

ミス・タバサと同じように契約しなさい」

私はため息をつく。 前例があるのだし、やり直しは無理ね…。

「あんた、感謝しなさいよ？ 貴族にこんなことされるなんて、めったに無いんだから！」

コントラクト・サーヴァントを唱えながら、少年に近づく。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。」

五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」

契約が終わると同時に、少年が叫び声をあげて転げまわる。

「いつてええつえええ！ 何だよこれ！」

「使い魔のルーンが刻まれてるだけよ、すぐに治まるわ」

多少治まったのか、サイトは手を押さえながら立ち上がる。

「はあああ、死ぬかと思った…」

「ふむ、珍しいルーンだな…、メモを取らせてもらっよ？」

「え？ ああ」

「よし、今日はこれで終了だ、皆は部屋に戻りなさい」

コルベールが終わりを告げると、生徒達はレビテーションを唱え飛び始める。

「空…飛んでる…？」

「ぼけっとしてないで行くわよ！」

少年はルイズに引っ張られるようにして、彼女の部屋に連れて行かれた…。

S i d e : O u t

一話目 契約（後書き）

最後までお読み頂き、ありがとうございます。

下手な文章が続きますが、少しずつ直していきますので、
生ぬるい目で見守って頂けたらと思います。

二話目 講義（前書き）

だいぶ、端折ったりしていますが、
最後までお付き合いいただけると嬉しいです。

二話目 講義

S i d e : 双馬

タバサの部屋に着き、俺は召喚されるまでの経緯を説明した。
しかし、異世界から来たと言っても信じられないのだろう、二人とも唸っている。

「まあ、異世界から来た事を覚えておいてくれ、別に信じる必要は無い。
それで、使い魔は何をすればいいんだ？」

「…実力が見たい」

「そうねえ、双馬ってメイジなの？」

「明日でいいか？ 疲れているんでね、休ませてもらいたい。
それと、俺はメイジじゃない」

「わかった…、ここのベッド使って」

「ありがたく使わせてもらおう」

俺は刀の無くなった鞘をはずし、ベッドに入る。

「夕食は…?」

「ちよ、ちよっと、もう寝るの?」

二人の声を聞き終わる前に、俺は眠った。

翌日

目を覚ますと、横でタバサが眠っていた。

俺はタバサを起こさないように部屋を出て、外へと向かった。

「うわっ」

「すまん、大丈夫か?」

外に出る途中、少年と出会い頭にぶつかった。

助け起こそうと少年の手を取ると、手に使い魔のルーンが刻まれているのが見えた。

「お前も使い魔なのか？」

「お前もって事は、あんたもなのか？」

「ああ、タバサの使い魔をすることになった。
俺の名は月影 双馬。 ソウマでいい」

「ソウマ？ 俺の名前は平賀 才人。 サイトって呼んでくれ。
ところでソウマは…日本人か？」

「いや、俺はイヴアリスから来たんだ」

「そっか…」

「まあ、同じ使い魔として、今後とも宜しくな」

「ああ、よろしく。 いけねっ、そろそろ戻らないと！」

サイトと別れ、広場に出ると『ライブラ』をルーンに向けて唱える。

「魔手のルーン、効果は両利きになる…か、特に害は無さそうだな。
さて、散策しながら戻るか…」

部屋に戻ると、タバサは既に起きていた。

「どこ行ってたの？」

「早くに目が覚めたから、少し散策に行っていた」

「そう…、朝食に行く」

食堂に着くと、誰かと言い争い中のサイトを見つけた。

しばらくするとサイトは呆れた顔をしながら、両手に何かを持って外へ出て行った。

「こっち」

タバサに引つ張られ、連れて行かれるとキュルケが既に食事をしていた。

「おはよう」

「あら、おはようタバサ、ソウマ」

「おはよう、キュルケ」

キュルケと挨拶を交わし、タバサの座る椅子を引く。

タバサは少し驚いたが礼を言って椅子に座ると、俺にも座るよう促してきた。

「適当に食べて」

「そうさせてもらおう」

食事が終わり、授業を受けるために教室へ向かう途中、二人が尋ねてきた。

「ソウマは貴族なの（かしら）？」

「いや、平民だが？　まあ、貴族の知り合いが居たから…。食事作法や、礼儀にはうるさくて覚えてしまったんだ」

教室に到着し、席に着くと中年女性が入ってきた。

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですね。

私はこうやって春の新学期に、様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみです。」

中年女性が笑顔で使い魔達を見渡す。

「変わった使い魔たちを召喚したんですね。
ミス・ヴァリエール、それにミス・タバサ」

「お初にお目にかかります、私の名は月影　双馬。
以後、お見知りおきをミセス」

「あらあら、礼儀正しい使い魔ですね。
私の名前はシュブルーズ、二つ名は赤土です」

俺がシュブルーズと紹介を済ませ、席に座ると講義が始まった。
火・水・土・風、四系統の内容を説明をタバサは横で本を読んでいたが、俺は集中して聞いていた。

中でも興味を惹いたのが伝説として語られる虚無について、詳しいことはわかっていない。

しかし、帰る為の可能性があるとすれば虚無か？　そう考えていると…、

「では、ミス・ヴァリエール。　貴方に錬金をして貰いましょう」

シユブルーズがそう言うと、皆が「え!？」と驚いた顔する。

「ルイズ！　お願い、やめて！」

キュルケがルイズに向かって叫ぶが、ルイズは教壇に歩いていった。

すると、周りの生徒達が机の下に隠れ始める。　キュルケやタバサも例外ではなかった。

「隠れて」

タバサに引つ張られるように机の下に隠れる。

「何が起きるんだ？」

尋ねると同時に、爆発音が響き渡った。

見れば突然の爆発に驚いた使い魔達が暴れ回っていた。

「なるほどな…」

その後、片づけを命じられたルイズとサイトを残し、タバサと共に食堂へ向かった。

タバサとキュルケと俺の三人でテーブルを囲み、先ほどの爆発や虚無ついて話していた。

「魔法は失敗すると爆発するものなんだな…」

「しない」

「そうね、魔法に失敗すると魔力が霧散して何も起きないわ」

「爆発は失敗じゃない…？　誰にも知られていない虚無、原因のわ

からない爆発…。

つまりルイズは虚無の可能性あり…と」

「ッ!？」」

「可能性があるだけで、確実には言えないがな…」

「ソウマ、貴方本当に平民なの？」

「鋭い…」

そんな会話を続けていると、後方から大きな声が聞こえた。

Side:Out

二話目 講義（後書き）

稚拙な文章が続きますが、最後まで読んで頂きありがとうございます。御座います。

三話目 決闘（前書き）

求む『文才』な状況ですが、お付き合いください。

三話目 決闘

Side：双馬

「決闘だ！」

その声を聞いた俺は、声の元に向かう。
そこにはサイトとギーシュと呼ばれる金髪の少年がいた。

「サイト、どうしたんだ？」

「ソウマか？ 聞いてくれよ、こいつが二股かけてた事がばれて振られたんだ。

それをシエスタに八つ当たりしてたんだよ。それを止めたら決闘申し込まれた」

「クククツ、人として最低だな？」

サイトから原因を聞き、俺は笑う。

「ソウマと言ったな？ き、君は平民のくせに、貴族を意見するのかね！？」

「ふう、今の話に貴族と平民の言葉は必要なのかね？」

「当たり前だ！ 平民は貴族に対して絶対服従なんだ！
平民が貴族に意見を言っではいけないんだ！ そうだろ皆！？」

周りの連中が「そうだ！ そうだ！」と同調する。

「どこの世界でも貴族は同じだな…、まともなのはいつも一握りか…。」

「ふん、家名も言えぬやつを使い魔風情が、貴族に意見するんじゃない！」

「似非貴族が何を言っている？」

「き、貴様！ 決闘だ！」

ギーシュの隣いた少年が俺に向かって吠える。
結局、俺とサイトは決闘をすることになり、広場へと向かうことになった。

「タバサ、すまん」

「別にいい、貴方の実力も見れる」

「彼の名はヴィリエ・ド・ロレーヌ。以前、私とタバサにちよっかい出してきたのよ。後でタバサとは決闘をしてボロ負けしてたけどね、フフフ」

そう言っって笑うキュルケ。タバサはこちらをじっと見つめていた。

広場

「諸君！ 決闘だ！」

ギーシュがそう言うのと歓声が広がった。

広場をぐるりと囲む生徒達、娯楽にでも飢えているのか、単に暇なのか…。

そう思えるほどの生徒が集まっていた。

「サイト、これを貸してやる」

俺はサイトの所へ行き、袋から取り出した正宗を渡す。

約七十cmほどの刀身、サイトには丁度良い長さだろう。

「え、日本刀？」

「名は正宗。 お前には丁度いい長さのはずだ」

「あ、ありがとう。 後で返すな」

「ああ、がんばれよ？」

俺はそう言つてサイトから離れる。

正宗を持ったサイトは一瞬、顔をしかめるがすぐにもとの表情に戻った。

「逃げずに来たことは褒めてやろう！

決着は僕の杖を奪つか、降参すれば終わりとしよう」

「へーへー、慈悲深いことで」

「口の減らない平民だ。言っておくが、僕はメイジだ。魔法を使わせてもらうが、卑怯とは言うまいね？」

「別にいいさ、俺も武器を使っしな」

そう言って鞘から正宗を抜き構えるサイト。

ギーシュは薔薇を振り、女性型のゴーレムが一体現れる。

「僕の二つ名は『青銅』、このワルキューレが君の相手をしよう」
言い終わると同時に、ワルキューレがサイトへ走り出す。

「破っ！」

サイトも合わせて走り出し、ワルキューレに対し一閃……。

「なっ!？」

ギーシュだけでなく、周りも驚いていた…。

なにせワルキューレが真っ二つになっていたのだ。

俺も少なからず驚く、一瞬ではあるが人を超えた動きをしたのだ。

「へ、平民にしてはそこそこやるようだね？　だが、これならどうかな？」

そう言っつて薔薇を振り、さらに六体のワルキューレを錬金する。

先ほどとは違い、三体が槍を残りの三体が剣を持っていた。

だが、サイトは焦るところか余裕の表情をしていた。

「今なら負ける気がしねえ、幾らでもかかって来いよ！」

挑発するサイト、ギーシュは顔を真っ赤していた。

「舐めるな！」

剣を持ったワルキューレ三体がサイトに襲い掛かる。

しかし、三位一体の攻撃をあつさり避け、サイトは刀を振るう。袈裟懸け・逆袈裟・一文字に三体を切り伏せ、ギーシュに駆け寄る。

戦術に問題ありだな…、剣に対しては槍だろ…。そう考えていると…、

「ま、参った！」

刀を突きつけられたギーシュが降参し、勝負は決着していた。そしてサイトは刀を鞘に納めると、その場で崩れるように倒れた。

「サイト（さん）！」

サイトに駆け寄るルイズとシエスタ、そして追うように俺はサイトに近づく。

「気絶しているだけだ、怪我もないし大丈夫だ。それより医務室へ連れて行ってやってくれ」

怪我らしい怪我は無い、人間には出来ない動きをした反動と判断し、ルイズ達に医務室へ運ぶよう促す。

「い、いつまで待たせるつもりだ！ 平民！
だ、だが、謝るなら決闘は無しにしてやってもらいたいぞ？」

背中からヴィリエの声が聞こえる。俺が振り向くと、ヴィリエは少し足が震えていた。

先ほどの戦いでギーシュが負けたのが原因か、唯の平民ではないことが原因かはわからないが…。

「待たせたか？ それに生憎だが、俺は馬鹿に謝る予定はない」

「き、貴様！ 言わせておけば！」

『ラナ・デル・ウィンデ エア・ハンマー！』

空気の流れを読み、難なく避ける。

驚愕するヴィリエだが、続けざまに魔法を唱える。

『デル・ウィンデ エア・カッター！』

先ほどと同じように避けるが、同時に鞘を放り投げる。すると《スパッ》といい音を出しながら鞘が二つに斬られた。

「不可視な上に、ずいぶんと殺傷能力が高いな…。
もしサイトが対峙してたら死んでいたかもな」

そんなことを呟く俺に、ヴィリエが言う。

「どうした、平民？ 避けてばかりじゃ勝てないぞ？」

「そうだな、そろそろ攻めるとしよう。」

だが、その前に一つだけ言うておく……。俺はサイトほど甘くはないぞ？」

『デル・ウィンデ エア・カッター!』

俺はゆっくりと歩きながら風の刃を避け、近づいていく…。
ヴィリエは魔法が当たらないことに焦り、風の刃を打ちまくるが
全て紙一重で避けられる。

『フ、フライ!』

空に逃げようとするヴィリエの足を掴み、そのまま地面に叩きつける。

「ま、参っ…、ゴフッ!」

降参の言葉を言う前に、鳩尾に蹴りを入れる。
のた打ち回るヴィリエを見ながら、俺は笑顔を浮かべながら言う。

「言っただ、俺はサイトほど甘くないと。」

本来、決闘は生命を賭けて戦うもの、死んでも文句は言えない…」

「ヒッ、た、助けて」

「…そこまで」

タバサが俺とヴィリエの間に入り、決闘の終わりを告げた。

S i d e : O u t

Side：オスマン

「無事…、でしたね。　オスマン殿？」

「そうじゃの…、にしてもあやつ何者じゃ？」

コルベール君、お主は『ディテクト・マジック』で確認をしたんじゃないろう？」

「ええ、一瞬ですが大量の目が見えました」

一瞬？　おまけに大量の目？　まったく、どうなつとるんじゃ…。あの男は眠りの鐘も効かぬし、遠見の鏡で見ていた事も気付いてる様子じゃった…。

「オスマン殿、やはり王宮に報告すべきでは…？」

「はあ、お主は戦争を起こしたいのかの？　伝説のガンダールヴに、メイジより強い平民…。

唯でさえガンダールヴは一騎当千なんじゃ、王宮がそのことを知れば戦争に使うのは目に見えているじゃろ？　ともかく、この件はわしが預かる。　良いな？」

「は、はい。　いつもながらオスマン殿の深謀には恐れ入ります。では、私は後始末のほうをします」

コルベールが退室するのを確認し、ため息をつく。

「双馬か…、まさかのう？」

Side: Out

三話目 決闘（後書き）

誤字・脱字などありましたらご報告頂けると助かります。

四話目 実力

Side: 双馬

決闘後の夜

タバサに実力を見せるため、俺は再度決闘を行った広場へと来ていた。

どうやら、昼間の決闘だけではお気に召さなかったらしい。

俺は袋から虎鉄と備前長船を取り出して腰に差し、準備をしてタバサの方を向く。

「…準備は？」

「いつでも」

「私が合図するわ。」

火が消えたら開始よ、『ファイヤー・ウォール!』」

俺とタバサの間に火が立ち上り、炎の壁が出来あがる。

炎を間に挟みながらお互いに睨み合う…、そして火が消えると同時にタバサが動く。

『デル・ウィンデ エア・カッター!』

ヴィリエと同じ不可視の刃が放たれるが、速度・大きさがまるで違う。

俺は手刀でかまいたちを放ち、相殺すると同時にタバサと距離を詰め、回し蹴りを放つ。

「くっ！ 早いっ」

『ラナ・デル・ウィンデ エア・ハンマー！』

タバサは寸前で後ろに飛ぶ、同時に風の槌を放ち反撃した。俺は風の槌を見据え、腰を落とし拳に氣を込めて構える。

「ふっ！」

小さく息を吐き、正拳突きで風の槌を打ち砕く。

そして、そよ風が後ろに抜けていった。

「この程度か？」

「嘘でしょ…？」

俺は挑発し、観戦していたキュルケは驚きの声をあげる。

そして、キュルケはあり得ないといった顔で俺の方を見ていた。

「…まだまだ」

『ラグーズ・ウォータル・イス・イーサ・ウィンデ』

「そう来なくては」

詠唱が終わるとタバサの周りに無数の氷柱が浮かんでいた。

それを見て俺はにやりと笑い、全身の力を抜き構える。

「…これで終わり」

『ウィンディ・アイシクル!』

タバサが終わりの言葉を告げると、全ての氷柱が俺目掛けて降り注ぐ。

避けるそぶりの無い俺に、キュルケはあせったようだが…、

《カチン》

鞘に刀を収める音が聞こえると、全ての氷柱が砕け散った。

『月影流 居合い抜き』

今度はタバサも驚いた顔をして見ていた。

これ以上の魔法はもう無いのだろう、俺はそう判断して言い放つ。

「今度はこちらから行くぞ？ 避けてみる」

『死ぬも生きるも剣持つ定め…、

地獄で悟れ！ 暗の剣!』

刀を振ると同時に、足元から三日月型の剣が突き出る。

タバサは地面からの攻撃に気付くのが遅れ、避けられずに直撃する。

「あつ…」

「タバサ！」

タバサが小さな声を上げると同時に、キュルケが叫ぶ。
突き刺さった剣が霧散すると、タバサは杖を落としその場で倒れた。

キュルケがタバサに駆け寄り外傷が無いことを確認していた。
その間に俺は袋からエーテルを取り出す。

「良かった…、ただの魔力切れみたい」

「これを飲ませろ」

そう言っただけキュルケにエーテルを渡す。　キュルケは「大丈夫なの？」と言った顔をしていたが、エーテルに魔力が込められている事に気づき、タバサに飲ませる。

「部屋に連れて行く」

「ええ、そのほうが良いわね」

まだ目を覚まさないタバサを抱きかかえながら、部屋へと戻る。
キュルケはタバサをベッドに寝かせるのを確認すると、自分の部屋に戻って行った。

俺は虎鉄と備前長船を袋に入れ、ベッドに入り込み、そのまま眠った。

S i d e : O u t

S i d e : . . . ? ? ?

城の一室、そこで男が酒を飲みながら一人でチェスをしていた…。

《コンコン》

部屋をノックする音が聞こえ、駒を持っていた手を止める。

「入れ」

「失礼します」

入ってきたのは秘書のような格好をしていた若い女性。

「ジョセフ様、ご報告します。 シャルロット様が召喚した人間ですが…。」

シャルロット様と戦い、倒したそうです。 ですが、メイジでは無いとの事です」

「メイジではないのにシャルロットを倒した？ ククク、クハハハハハッ！」

ジョセフと呼ばれた男は報告を聞いて、急に笑い出した。
そして何かを思いつき、女性に対して命令を下す。

「シェフィールド！ その人間に刺客を送り込め、隙あらば殺して

も構わん！

だが、シャルロットは殺すなといい含めておけ」

「はい、すぐに準備いたします。」

シェフィールドと呼ばれた女性は踵を返し、退室する。

ジョセフはまだ笑っていた。まるで新しい玩具を買い与えられた子供のように…。

S i d e : O u t

四話目 実力（後書き）

短いですが、ここまでです。

五話目 本音（前書き）

なかなか上手く書けません。
変な部分が多いですが、ご容赦ください。

五話目 本音

Side: 双馬

翌日

「あの剣は何？」

それが俺が目覚めた時に聞いた、第一声だった…。
呆れた顔する俺をタバサはじっと見つめていた。

「名を『暗の剣』、対象の魔力を奪い使用者に還元する技だ」

「技？」

「ああ、騎士が神に背を向けることで、ダークナイト暗黒騎士となる。

その暗黒騎士になった者が修練を積み、技を編み出した。

それゆえ、対人に特化し、魔力や生命力を奪う…。『闇の技』と成った」

「『暗の剣』、…私にも教えて欲しい」

『闇の技』、そう言ったにも関わらず教えて欲しいか…。闇の力が欲しいのか、それとも単純に力が欲しいのか。見極める必要…は無いな、単純に力が欲しいのだろう。

「そうだな…、条件を呑めれば教えてやる」

「…その条件は？」

「簡単なことだ。　タバサ、お前にとって大切な者を殺せ。
それが、暗黒騎士になるための第一歩になる」

「なっ！？」

俺はそれが当たり前、と言う様な顔をしてタバサに告げると、タバサは驚き声を上げる。

闇の力を得るんだ、その程度は軽くこなして貰わないとな…。
剣を極めずに、しかも簡単に使えるようじゃ、ガフガリオンが浮かばれないさ。

「…ソウマもそうしたの？」

「さてな」

「私には無理…」

「だろうな、お前の目には復讐の炎が宿っているが、小さな光を守るために燃えているように見える。

もとより無理な話だったんだよ、お前にはな…」

俺の言葉に俯くタバサだが、少し怒っているように見える。

「初めから知っていたの？　知っていたのに条件を提示したの…？」

「そうだ」

「ソウマ！ 貴方は！」

殴りかかろうとするタバサの腕を掴む。
よほど頭に血が上っていたのだろう…。魔法を使わずに殴ろうとしたのだから。

「家族だろう？ お前が守りたいものは」

タバサの腕を掴んだまま、俺は問い掛ける。

そして、家族という言葉にタバサは一瞬怯えるような目を見せた…。

「…守りたい、家族を…、母様を…」

「そうか、なら闇の力は余計に止めておけ、アレは人に不幸しか招かない。」

使えたとしても、使い続ければ家族を、大切な人を失っていただろう」

「だけど！ 力が…、母様を守るための力が足りないの…」

「タバサ…、個人の力には限界がある…。 なら、タバサと俺の二人の力なら？」

それでも守れなければ、キュルケやシルフィードも合わせた力なら？」

「そ、それは…」

「迷惑と思うな。 キュルケやシルフィードはお前を助けたいと思っ
っている。

そうだろう？ キュルケ」

俺が扉に向かってキュルケの名を呼ぶ。 タバサは一瞬意味が分
らないといった顔をしたが…。

「何時から気付いてたの？」

問いかけと共に部屋に入ってくるキュルケがそこに居た。 だが、
俺は問いかけに答えず、黙ってキュルケを見ていた…。

「そう、でもソウマ、貴方の言うとおりよ。

タバサ…、貴方は何でも一人で背負いたがる。

私は貴方が助けを求めるまで待つつもりだったけど、もう待たな
いわ」

「え？」

急な展開についていけず、タバサは相変わらず分らないといった
顔をしていた。

そんなタバサをキュルケは笑顔で見ていた。

「言っただろ？ お前は一人じゃないと。 これからは友を仲間を
頼れ。

そして、今日から俺もタバサの仲間の一人だ」

そう言ってタバサの頭に手を乗せる。

すると、タバサは目に涙を滲ませながら俺を見上げてきた。

「泣きたいときは泣いたらいい、もう我慢する必要は無いんだ」

今にも泣きそうなタバサを抱きしめて、俺は優しく言う。

そして、溜まっていたものを吐き出すようにタバサは泣き続けた

…。

泣き疲れ、眠ったタバサをベッドに寝かしながら俺はいう。

「キュルケ、タバサは今日欠席すると伝えておいてくれないか？
それと、食事についても頼む」

「ええ、分ったわ、後お願いね？」

そう言うつとキュルケは部屋を出て行った。

タバサを眺めながら、俺はラミアの豎琴を取り出す。

「久しぶりに弾いてみるか…」

俺は弦き、豎琴に手をかけ歌を奏で始めた。

S i d e : O u t

S i d e : キュルケ

私は今、とても気分が良かった。　ソウマのおかげで本当のタバサが見れた気がしたから…。

そして部屋に戻り、フレイムを連れて厨房へと向かう途中、メイドがいたのでタバサの食事を頼む。

「さて、フレイム。　私達も食事に行くわよ」

「きゅる」

食堂に着くとルイズを見かけない、そういえば昨日の決闘で使い魔が倒れたんだっけ…。　まだ、看病でもしてるのなら、後で見舞いにでも行こうかしらね。

そんな事を考えつつ、私は食事して教室へと向かった。

「それにしても、ソウマ…。　彼は一体何者かしら？」

職業を傭兵なんて言っていたけど…。　でも嘘をついているようには見えないし…。」

考えても仕方ないわね…。　今はタバサとの距離が縮まったことを喜びましょう。　彼が何者か…。　それはいずれ分ることのはずよね。　メイジに勝てるほどの傭兵…。　もしかして伝説の傭兵とかかしら？　フフフ、楽しくなってきたわ。

S i d e : O u t

五話目 本音（後書き）

短いですが、以上になります。

ガフガリオンについてはFFTを検索していただけると分ります。

六話目 母親（前書き）

今回は長いです。

六話目 母親

翌日

翌日、朝食を取り終えた三人はシルフィードに乗り、上空約千メートルの場所に来ていた。

「私の本名はシャルロット・エレーヌ・オルレアン…」

「オルレアン！？ タバサ、貴方ガリア王国の王族だったの！？」

タバサの言葉に驚きの声を上げるキュルケ。

「現ガリア国王ジョセフの弟シャルルが私の父様。無能王と呼ばれるジョセフに比べ、父様は若干十二歳の若さで風のトライアングルになり、周囲からの人望も厚かった。だけど優秀がゆえに、父様は五年前に暗殺された。そして、母様は私を守るために…、毒を…毒を飲んで心を壊されたの」

「そうか…、少し質問していいか？」

ソウマの言葉にタバサは頷く。

「ジョセフが無能王と呼ばれるのは何故だ？」

「ジョセフは王族でありながら、魔法が使えない。それが、無能王たる所以^{ゆえん}」

「魔法が使えなければ、無能王か……。だが、無能なのは魔法だけで、王としてはかなり優秀のようだ。でなければ、タバサの父は今でも生きていただろう」

「なぜかしら？」

キウルケは分らないといった顔をしてソウマに質問をする。

「ああ、周りから無能王として見られ、弟は優秀で人望も厚い。しかし、弟は人望もない無能と言われる王に暗殺された。それがどういうことか？」

王族を暗殺をする場合は容易ではない、だがそれを成し得たという事は、ジョセフが無能ではないという証明だ。人の力は何も魔法だけじゃない、魔法の才能がない分、別の才能があっただろう」

タバサは啞然としていた……。魔法が使えない、そして無能王、その言葉に騙されて、相手の力を見くびっていたのだ。

「もう一つ質問だ。タバサ、お前の母親は毒を飲んで心が壊れたのか？」

タバサはコクリと頷く。

「直せるかも知れないぞ？」

「「本当!?!」」

タバサとキュルケが声を揃えて聞き返す。

「ああ、俺の世界では万能薬と言う代物でな、どんな毒でも解毒できる効果がある。残りには…、一本しかないな、タバサお前にやる」

ソウマは万能薬をタバサに向けて放り投げる。タバサは慌ててそれを受け取り、大事にしまう。

「ちょ、ちょっと！ どんな毒でもって…、そんな物が貴方の世界にはあるの？」

それに、それって高価な物じゃないの？」

キュルケの言うことはもつともだが、ソウマの居た世界では市販されている薬だ。

この世界でなら高価な品になりうるが、同じ効果の『エスナ』という魔法もあるため、ソウマにとっては無用の長物だ。

「…いいの？」

「俺には無用の物だ。だが、それしか無いからな、落として割つたりしない様に気をつけるよ？ この世界ではもう手に入らないんだからな…」

「どんな毒でも解毒できる薬…、売れば一体幾らになるのかしら？」

タバサ達はキュルケが邪な考えをしているのを余所に話を進める。

「ところで…、直した後はどうするんだ？ 治った事がわかると、また毒を盛られるか、殺される可能性がある、別の場所に隠れたほ

うがいい」

「それなら、私の家に着たらいいわ。ほかならぬタバサの為だもの」

「二人とも、ありがとう…」

もしタバサ一人であつたら出来なかつた事…、タバサは二人に感謝の言葉を告げる。

そんな様子を見ながらソウマは考えていた。キュルケの家はゲルマニアでも屈指の家柄、いかに王族といえども迂闊に手出しは出来まい…。だが、できるだけ先手を打っておくべきだろう。

「行動するなら早いほうがいいだろう、一昨日のタバサとの勝負を監視していた者がいるからな…」

「わかつた。シルフィード、私の家へ」

「きゅいっ!」

シルフィードに指示を出し、一行はタバサの屋敷へと向かった。屋敷へと到着すると、そこには執事が出迎えていた。

「お帰りなさいませ、シャルロット様。ところでお嬢様、後ろの方々は？」

「彼らは友達。今は時間が無いの、すぐに母様の所へ」

「お嬢様!？」

執事の言葉に比べると、タバサはわき目も振らずに屋敷の中へと入って行った。

「キュルケ、一緒に行つてやれ」

「わかつたわ、後お願いね。 まって、タバサ」

キュルケにタバサの後を追うように促がすと、それに同意して走って行く。

「シャルロット様が屋敷に友達を連れてくる日が来るとは…、感激でございます」

よほど嬉しかったのだろう、ハンカチで目を抑えながら「感激です」と呟くばかり。

「執事殿、少しよろしいか？ 私の名は月影 ソウマ、職業は傭兵だが、今はタバサ…、いやシャルロットの使い魔をやっている」

「なんと！ 人間の使い魔とはまた珍しい…。 っと、申し訳ありません、失礼を致しました。

私の名前はペルスランと申します。 シャルロット様に執事として仕えさせて頂いています」

何時までもそのままにしておけず、自己紹介を互いに済ませ、ソウマは今までの経緯を説明することにした。

オルレアン公夫人を治す薬を持ってきたこと、治った後はキュルケの実家に匿って貰う事…。

「…というわけだ」

「そうでしたか…、シャルロット様に代わりに改めてお礼申し上げます」

感謝の言葉と共に、深く頭を下げるペルスラン。

そして、頭を上げたペルスランの顔には笑顔が浮かんでいた。

先ほど、タバサが友達を連れてきたと言った時以上に、嬉しそうに…。

S i d e : ソウマ

「いや、かまわ…」

構わない…、そう言い終わる前に、殺気を放っている者の気配に気付く。

そして、俺は気配の方へと向き直り、ペルスランに告げる。

「どうやら、お客さんのようだ」

「お客様ですか…?」

どこにいるのだろうか?と言った顔をするペルスランを余所に、俺は気配のする方に声をかける。

「そこにいるんだろう、出てきたらどうだ?」

「よく、気付いたな…」

俺に言われ、男が木の陰から現れる、その手にはナイフを携えて。

「それだけ殺気を放っていれば気付く」

俺がそう言い放つと、男は笑いながらこちらに歩いてきた。

「けけけ、楽しめそうだな…」

「ペルスラン殿、下がっててくれ」

「しかし…、シャルロット様の友達に「下がれ」…、分りました」

俺は殺気を解放すると共に、ペルスランの言葉を遮る。ペルスランは渋々承知すると、屋敷のほうへと下がっていった。

「こちらの名前は知っているのだろうか？ 貴様の名を教えてもらおうか」

「地下水…」

名を告げると、地下水が俺の懐へと飛び込み、ナイフを横に一閃する。

俺は身を縮めて躲すと同時に、掌底を叩き込み相手を吹き飛ばす。

「ぐっ！ 人間の癖になんてえ力だ」

吹き飛ばされ倒れた地下水だが、すぐに起き上がる。

しかし、胸へのダメージが大きかったのか、地下水は胸を押さえ

ながら呻く。

「ちっ…」

『エア・ハンマー!』

気を込めた拳で、風の槌を打ち砕く。

その光景を見た地下水は呆れた顔をしてた。

「てめえは本当に化け物だな…。魔法を素手で打ち砕くなんて人間に出来るわけがねえ」

「褒め言葉として受け取っておこう」

言い終わると同時に、その場から俺の姿が消えていた。一瞬のことに地下水は驚きまわりを見渡すが、俺は既に地下水の後ろに立っていた。そして、そのまま回し蹴りを叩き込む。

「ちい!」

ガードされるが、それでも受けきれずに転がりながら吹き飛ぶ。

「いい反応だ」

「はあああ、ありがとよ!」

『ウィンディ・アイシクル!』

地下水の詠唱が終わると、俺に向かって無数の氷柱が襲い掛かる。数、威力はタバサより上だったが、俺は全てを避けきって悠然と

立っていた。

「弱いな……」

「てめえが強すぎるだけだ！ 化けモン！ だがな、これで終わらだ！」

『アイス・ストーム！』

突如、竜巻が立ち上り、中には光る粒が見える。光って見えるのは氷の粒か？ おまけに先ほどの氷柱を巻き込みながらこちらに向かってくる。

だが、避けられないほどでもない、そう考えてチラリと背後を見る……。

「避けたければ避けな！ 後ろの屋敷がどうなっても良いならな！」

「三下のセリフだな。だが、その企み……打ち砕いてやろう」

『行方知らぬ風達よ、我が声に集え……』

天空への門を開かん、トルネド！」

俺は『トルネド』を唱え、竜巻を発生させて相殺するが、その余波で氷柱や氷の粒が周囲を飛び交う。そして、それが治まると地下水は倒れていた……、どうやら心臓を氷柱に貫かれたようだ……。

「まだ生きているか？」

「な……、ナイフを……」

その言葉と共に地下水は絶命する。俺は近くに落ちていたナイフを拾い上げる。

魔力を感じるため、マジックアイテムと判断するが別段珍しいところは見当たらない。

その瞬間、体中を何かが駆け巡る。しかし、すぐにそれは消えてしまった。

「な、何故てめえは俺の支配を受けつけねえ！？
それに…、ぎえええええ！　な、何か居やがる！」

「ふむ、ナイフが喋るとは珍しいな…。それに本体はお前か、地下水よ」

「ちつ、そうだ…、俺が地下水だ。どうする？　俺を壊すか？」

「壊すかどうかは話を聞いてからだな」

「何が聞きたい？」

地下水から聞き出した情報を整理する。地下水は持つ人間を支配でき、支配した人間の魔力が自身の魔力を使うことで、魔法を行使することができる。そのため、魔力を持った人間の場合はより強力な魔法を行使できるとか…。

そして、肝心な雇い主…、女ということしか分らないとのこと、殺せば一万エキュール貰えると聞いてホイホイ乗ったらしい。

「…なるほどな。地下水、お前は俺に従う気があるか？」

「な、なんでてめえ見たいな化けモンに…、壊すなら壊しやがれ！」

「壊したところでお前は死なないだろう？ 刃を折ったとしても再生する…、違うか？」

「ばれてら…、じゃあどうするってんだ？」

「俺には『シャナク』という魔法があつてな…、それはどんな呪いでも解くことができる。お前に使えばどうなるかな…？」

「し、従います！ い、いや、従わせて頂きます！」

こうして、俺は地下水を手に入れた。

地下水を使えばこちらの世界の魔法を使える…、目くらましに使えるな。

さて、タバサ達のところへ向かうか…。

S i d e : O u t

S i d e : タバサ

「ああ、シャルロット…、こんなに大きくなって…」

母様にソウマから貰った万能薬を飲ませると、私の方を向きながらシャルロットと言ってくれた。

「母様！」

「ごめんなさいね、貴方には辛い重いばかりさせて…」

抱きつく私に、母様は昔のように頭を撫でてくれる。

「大丈夫、今は友達や、仲間がいるから」

「お初にお目にかかります。私の名はキュルケ・フォン・ツェルプストーと申します。タバサと同じ魔法学院の生徒で、タバサの友達です」

「私は亡きオルレアン公シャルルの妻、そしてシャルロットの母です。」

キュルケさん、シャルロットと仲良くしてくださいね？」

「もちろんですわ」

「母様、そろそろ屋敷を出る支度を…、詳しい話は後で」

まだ満足に動けない母様の横で、キュルケと一緒に持つて行くものを厳選していく。

しばらくすると部屋の扉からノックが聞こえてくる。

「シャルロット、キュルケ、支度は済んだか？」

「大丈夫」

支度を済ませた私達は、母様と荷物に『レビテーション』をかけて外へと出る。

「早くここを出たほうがいい、先ほど地下水に襲われたばかりだからな…。」

襲われたとき近くに気配は無かったが、危険であることには変わりないだろう」

外へ出る途中、ソウマが事も無げに言ってきた。

だが、その言葉に私は驚いた。地下水といえば、年齢も性別も不明という謎の傭兵メイジ…、誰にも気づかれずに現れ、目的を果たすと消えてしまうその手腕から地下水と呼ばれている…、そんなのを相手にしてたなんて気付かなかった…。

「地下水は？」

「ああ、ここにいる」

ソウマがナイフを取り出す。するとナイフが喋りだした。

「おう、宜しくな嬢ちゃん」

「インテリジェンスナイフ？」

「ああ、だが今は俺の支配下にある、問題はない」

「…わかった」

私は母様と荷物、ペルスランを含む使用人を全員をシルフィードに乗せる。

「シルフィード、少し重いけどお願い」

「きゅいつ!」

そして、皆をシルフィードに乗せてキュルケの実家へと急いだ。
向かう途中、母様と話す使用人たちが涙を流しながら喜んでいた
…。

S i d e : O u t

七話目 訓練（前書き）

前回同様長めになっております。

七話目 訓練

決闘から三日目、ソウマは一足先にキュルケの実家から学院へと戻っていた。

そして、広場で目を覚ましたサイトとソウマは会っていた。

「ソウマ、ありがとな」

「何、俺から貸したんだ。 気にすることはない」

サイトは礼を言いながら、決闘の際に借りていた刀をソウマに返す。

「それにしても、その刀はすげーな！ なにせ、持っただけで強く慣れるんだし！」

刀を褒めるサイトだが、自身の持つ力に気付いていなかった。逆に気付いていたソウマは苦笑しながら、サイトに言葉を返す。

「いや、持っただけで強くはなれないぞ？ 単に切れ味がいいだけだ…。」

つまり、ワルキューレを斬ったのはお前の力だよ、サイト」

「そ、そうなのか？ 俺てっきり…」

ソウマの言葉を信じきれず、サイトは少し疑うような眼差しを向

ける。

今まで普通の学生をしていた人間が、刀を持っただけで戦えるようになる…。

そんな状況になれば、刀に何か力があると勘違いするのも無理はない。

「そうだな…、確認がてらに少し手合わせするか。

最初は素手で、その後に木刀を持った時の力の違いを見れば十分だろう」

「え、良いのか？」

ソウマの提案にサイトは困惑するが、自身の実力も知りたかったため、ソウマに向かって構えを取る。

「遠慮はいらん、来い」

その言葉が開始の合図となり、ソウマに向かってサイトは地を蹴って突進してくる。

「ていつ！」

「遅い」

サイトの突きをあっさりと止め、そのまま自由に攻撃させる。

だが、腰の入っていない突き、重心の定まっていない蹴りを受け流しながら考える。

全ての攻撃が軽い…、それ以上に体力がない。既に息を乱しているサイトを見る。

「はあっ！」

「もういい、わかった…」

ソウマは全ての攻撃を受けきると、少し頭を抱えていた。
本当に決闘に勝ったサイトなのか？ 実は別の人物と入れ替わったのではないかと思うほどであった。

「…はあ、はあ、全然当たらなかった」

そう言つと、サイトはその場に座り込み、息を整えようとする。
横目でソウマを見るが、自身の攻撃を全て防いだソウマは平然と立っていた。

「少し休憩したら、次は木刀を持ってみる。それで何か変化があったら教えてくれ」

そして、サイトが落ち着いたのを見てソウマは木刀を渡す。

「おっ、体が軽くなった」

「サイト、左手のルーンが光っているぞ？ どうやら武器を持つと能力を発揮するタイプのようなな。」

その状態でかかって来い、手加減なしの全力でな」

決闘のときのようにつ体が軽い…、ソウマの言っていた通りルーン
の力らしい。

さっきはソウマに攻撃が当たらなかったけど、今なら…！

「はっ！」

「速い…、先ほどとは大違いだな」

素手の時と違い、普通の人間には出せない速度で動いている。
が、速いだけで型も何もあつたもんじゃない、これでは訓練した人間には通じないだろう…。

「やつ！」

サイトの繰り出す袈裟切り、逆袈裟、をソウマは全て受け流す。
武器の使い方もわかるのか？ サイトはそうとは思えないような斬り方をする。

「サイト…、そのまま動くなよ」

『月影流 かまいたち 鎌鼬！』

「え！？ ちょ、ちよつと待って！ うわっ！」

ソウマが放つた真空の刃がサイトの持つ木刀に当たり、一部が粉々に碎け散つた。

「サイト、その状態でもまだ体は軽いかな？」

「え…？ ああ、軽いまだな…、って！ さっきの当たってたら死んでたんじゃないか！？」

「安心しろ、死なないう手加減はしていた。それに木刀にしか当たらない様にも調整していた。
だがそのおかげでわかつたぞ、サイト」

「そ、そうなのか…。で？ なにが？」

ソウマには何かわかったようだが、サイトには理解できていなかった。

「木刀の代わりに、この石を持ってみる」

「おっと。で、この石に何かあるのか？ もしかして特別な力を持った石とかなのか！？」

ソウマが放り投げた石を受け取り、色々な角度から確認するサイトだが、特に何かありそうにも見えない。

「いや、先ほどそこで拾ったただの石だ。それより何も感じないか？」

木刀を持ったときのように体は軽くなったりしないか？」

「いや、しないなあ」

ただの石、その言葉に少し肩を落とすサイトはこの石に何の意味があるのか考えていたが、まったくもってわからなかった。

「…サイト、その石は何に見える？」

「え？ ただの石じゃないのか？」

道端に落ちている石を、特別な石だという人は居ないだろう…、もしかして宝石の原石とかか？

「ただ、どうみても普通の石にしか見えない……」

「ただの石だが、それを人に投げたら？」

「当たり所によつては、怪我するかもしれない……」

「そうだ、石は人に投げれば怪我をさせることが出来る、俺が本気で投げれば人を殺せるだろう。」

「つまり、石は武器になるということだ」

「なるほど！　って、おっ！？　体が軽くなったぞ、ソウマ！」

「サイトは石を持つことで体が軽くなることに驚く。」

「先ほどまで何も感じなかったが、今は木刀を持っているときと同じぐらい体が軽くなっていた。」

「つまりはそういうことだ、どんな物でもサイトが武器として認識すれば、ルーンは発動する。」

「逆にお前が武器として認識しなければ、ルーンは発動しない。わかったか？」

「ああ！」

「ソウマの説明にサイトは頷き納得する。」

「本題だ、サイト。　お前を鍛えてやろう」

「えっ！？　なんでそんな話に？」

「いくら武器を持ったから強くなるとはいえ、武器がないときの対

処ができないだろう？

せめて武器を持っていなくても、自分の身ぐらい自分で守れるようになるためだ」

「なるほど、何から何までさんきゅーな、ソウマ」

戦場…、があるかは知らないが刺客が送られることもあるんだ、自分の身を守ることぐらいはしてもらわないとな…。

それに元日本人として、同郷の者に死なれるのは気持ちのいい物でもない。

「気にするな。では、手始めに五キロ走って、腕立・腹筋・背筋をそれぞれ五十回を三セットやれ。

後は二日毎に距離と回数を倍に増やして、最終的には今日の十倍をこなせるようになれ、異論は認めん」

「…もうちよつと減らない？」

いきなりその訓練量はちよつと多い、そう思うサイトだが…。

「サイト、お前には時間があるだろう？ それに強くなればモテるかも知れないな…」

「やる！ やらせて頂きます！ うおおおお！」

最後の一言を聞くとサイトは全力疾走して走っていった。

なんと単純な…、おまけに考えなしに長距離を全力で走るとは…、だがアレだけやる気があれば大丈夫か…？

Side:ソウマ

「ちょっと！勝手に私の使い魔に変なことさせないで！」

背後から声が聞こえ、振り向くとそこには怒った顔をしたルイズが居た。

「ミス・ヴァリエールか？丁度良い、君にも少し言っておきたい事がある」

「な、何よ？」

怒気を孕んだ俺の言葉にルイズは少したじろぐ。

「なぜ彼を召喚したんだ？」

「知らないわよ！召喚したらアイツが出てきちゃったんだから！」

知らない？自分で呼び出したんだろう？こいつは頭がおかしいのか？それともこれが正常なのか？

ルイズの無責任な言葉にイラつきながらも告げる。

「だが、君は戦う術も知らないただの平民を呼び出したんだ。彼にだって家族は居るだろう、それを君は自身の都合で呼び出し、家族から引き離れた。」

その意識が今の君にはあるか？」

「そ、それは…」

誰だつて本人の意思を無視して家族や大切な人と引き離されれば怒るだろう。

だが、ルイズはそんな事をお構いなしにサイトを呼び出し、本人の意思を無視してこの世界に繋ぎとめた。

おまけに家畜同然の扱いをしながら……。

「サイトの居た世界と違い、この世界は魔法が使えないものを家畜同然にしか扱っていない。

そんな彼がこの世界で生きていくには、鍛えるしかない……。

魔法が使えなくてもメイジに勝てるぐらい……、それぐらいの権利は彼にあつても良いだろう？」

「わかつたわ……」

先ほどからずいぶんと素直だが、自身がやったことに罪の意識でも感じているのか？

そんなものを感じるよりも、サイトが元の世界へ戻るまで、生活をまともな水準にしてやればいいのだが……。

「ああ、紹介が遅れたな。俺の名前は月影 双馬、タバサの使い魔だ」

「私の名前はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ。

ソウマ、貴方ならルイズでいいわ」

「では、これから毎日サイトを鍛える、鍛えている時間だけは自由にさせてやってくれ」

ルイズは俺の言葉に頷き、学院へと戻っていった。

外ではサイトがまだ走っていたが全力疾走は堪えたのだろう、自分のペースに戻して走っていた。

S i d e : O u t

七話目 訓練（後書き）

まだまだ、精進いたします。

八話目 監視（前書き）

まだまだ稚拙な部分や至らないところもあるとは思いますが、お付き合い頂けると嬉しいです。

八話目 監視

サイトを鍛え始めてから、約一週間ほどが経過していた…。

午前中は体力作り、午後には組手や木刀を使った実践形式の訓練を行っていた。

「はっ！」

サイトは木刀を両手で低く構え、地面を蹴って間合いを詰める。瞬く間に懐へ潜り込むと同時に下段から斬り上げた。

「ふっ」

だが、それを見越していたソウマは木刀を持った腕に力を込め、斬り上げる瞬間を狙って打ち落とす。

相殺…にはならず、サイトの足元には穴が空き、そこに持っていた木刀がめり込んでいた。

「痛ってー！ ソウマ、少しは手加減してくれよな！」

サイトは赤く腫れ上がった両手に、息を吹きかけながら抗議する。

「ぎりぎり折れないように加減はしていた。 していなければサイトの両手は失くなっているさ。」

それよりサイトはもう少し戦い方を考えろ、特に下段から仕掛けるなら足を狙え」

「そ、そうなのか…。 にしても、速さを生かした攻撃だと思った

んだけど…。

力負けしない攻撃手段を考えないとだめかあ」

ソウマから貰ったポジションを手に塗りながら、
上段や下段からの攻撃方法を頭の中でシミュレートする。

「ふむ、そこまで理解しているなら大丈夫だな、今日はここまでにしよう。」

俺は戻るが、疲れを残さないようにマッサージを忘れるな？」

「ああ、わかった」

芝生に座り込んだサイトは指から手にかけて、念入りにマッサージをする。

以前、マッサージが面倒になり適当にこなして寝たところ、翌日は筋肉痛がひどく立てないほどだった。

その日以降、訓練の後はマッサージを欠かさず行うようにしていた。

扉を開け部屋の中に入ると、静かに本を読むタバサがいた。

「タバサ、待たせたな。図書館に行こうか」

「うん」

日課の訓練が終わった後はタバサと一緒に図書館へと足を運んでいた…。

初めて来た時に手に取った本を見て気付いたことだが、驚くべきことにこの世界の文字が読めた。

ルーンの影響が不明だが、文字の勉強をしなくて済むのはありがたかった。

「ふう…、これも駄目だな。やはり、すぐには見つからないか」

小さくため息を吐き、ソウマは手がかりすら掴めない状況に少し気落ちした表情を見せる。

タバサは持っていた本を閉じ、奥に見える扉に指をさす。

「奥の書庫にあるかも知れない。けど、閲覧には許可が必要」

最近は毎日のように通う図書館では人の姿をほとんど見かけず、受付に司書もない有様だ。

そのため静寂に包まれた館内の奥にある扉は、不気味な雰囲気が漂っているように見えた。

「タバサは入ったことあるのか？ それに、ここには司書がいないのか？」

「ない。司書がいない代わりに学院長が管理してる」

入口の扉を開ける際に『アンロック』を使っていたことを思い出す。

図書館の入口と同じ様に奥の扉にも魔法で施錠されているのだろう。

「その人物はすぐに閲覧許可をくれるような人なのか？」

タバサは首を横に振る。

「なら、今は閲覧できる範囲で探すしかないな」

ソウマは持っていた本を机に置き、まだ読んでいない本を手にとって開く。

タバサも本に目を戻し、二人の間に会話がなくなると辺りに静けさが戻る。

それからしばらくの間、本を読んでいるとタバサがポツリと呟く。

「ソウマは…、どうして元の世界へ戻りたいの？」

「仲間に戻ると約束した。それを反故するわけにはいかない。

…と、言いたいところだが向こうでの目的は果たしている。ラムザ達と連絡が取れれば十分だ」

「ほ、本当！？」

椅子を押しよけるようにして突然立ち上がり、タバサの声が館内に響いた。

「あ、ああ、本当だ」

突然の大きな声に少し驚きながらソウマは答える。

その言葉を聞いたタバサは何かを思い出したかのように言う。

「…遠見の鏡があれば異世界を見れるかもしれない。だけど、かなり希少」

「遠見の鏡の資料は？」

「この場がない。あるとしたら奥の書庫」

「また奥の書庫か…。だが、可能性が見つかっただけでも良しとしよう。」

今日はもう遅い、学院長には明日許可を貰いに行こう」

ソウマの提案に対してタバサは首を振る。

「ダメ、明日は虚無の日で学院も休み。それに明日は町へ行く、もちろんソウマも一緒」

絶対に譲れないと真剣な目をしながら、タバサは口調を強めて言い放つ。

「わかった。許可を貰いに行くのは次回にして、明日は買い物に付き合おう」

すぐに調べないと資料が無くなるわけでもない、時間のあるときに許可を貰って調べればいいだろう。

それに、せつかくの休日を俺の都合で潰すわけにもいくまい。

「買い物ついでに武器を買ってもらえるか？」

「わかった、案内する」

「ああ、頼む。明日の事も今後の事も決まったところで部屋に戻ろう」

「うん」

二人が図書館の外へ出ると、ソウマの腕に何かが絡み付いてきた。

「そう引っ付かれると歩きにくいんだが、離してくれないか？」

「いや」

「そうか、嫌なら仕方ない」

振りほどくことを諦め、腕を組んだまま部屋へと戻っていった。
途中でキュルケがその光景を目撃して何か言ってきたが、無視して部屋に入るとキュルケもついてきた。

その後、なぜか買物にキュルケも一緒に同行する話になり、少し不機嫌そうな顔をするタバサだった…。

その夜、タバサの部屋から抜け出す一つの影があった。

タバサの部屋から広場へ移動すると、学院の出入り口の門とは逆方向にある塀を飛び越えて外へと出る。

学院から離れるように森の中を走っていると、後方から追いかけてくる気配を感じた。

「監視は一人…いや今日は二人か…」

呟くと同時に動きを止め、後ろを振り返る。　が、そこには木々がひっそりと佇むだけであった。

タバサの使い魔になってから監視されていることに気づき、毎晩その監視者の始末していた。

「気付いていないとでも思っているのか？　隠れてないで、さっさと出てきたらどうだ？」

「いやはや、お見事ですな。　それでも自身はあったのですが…」

木々の隙間から現れ、ソウマに歩み寄る…その人物はコルベールだった。

「コルベールか、何の用だ？」

「こんな夜更けに学院の外へ向かう貴方をみて、何か良からぬ事でも？　と思い追いかけてきました」

コルベールは何食わぬ顔をして答えるが、何かあればすぐに対処できるように右手に杖を持っていた。

「良からぬ事…ね。　コルベールは気付いているか？」

「何をですか？」

含んだ笑いを見せて問い返すコルベールに、ソウマは言葉を返す。

「そうだな…、これから行う事はあんたの生徒を助ける行為だ。そんな事をしなくても助けられる自信があんたにあるなら止めてもいい。どうする?」

「それは…」

コルベールは少し思案するが、ソウマは考える暇を与えない。

「すぐに決断出来なければ諦める、このまま逃げられても困るのでな」

そうコルベールに告げるとソウマは『テレポ』を使う。

「ソウマ殿!？」

忽然とソウマの姿が消えたことに驚き、狼狽するコルベール。ソウマは一瞬にして木の陰に隠れていた人物の背後に移動していた。

「さよならだ」

突然の背後からの声に逃げようとする監視者だったが、既にソウマの腕が首に巻きついていていた。

助けを求める声を出す間もなく、『ゴキッ』という音と共に監視者の首はあらぬ方向に曲がり倒れた。

『悠久の時を経てここに時空を超えよ、我にその扉を開け。 デジヨン』

詠唱が終わると倒れている監視者を中心に黒い円状の渦が広がり、

徐々に沈んでいく。

監視者の体が見えなくなると、渦も一緒に消えたのを確認してコルベールの下へと戻る。

「ソウマ殿、殺したのですか…？」

「ああ」

ソウマの行動を見ていなかったコルベールだが、気配には気付いていた。

そのため、突然消えた気配に困惑しつつもソウマが何かしたのだらうとわかっていた。

「そう…ですか…」

「人を殺すのが嫌なら人と関わるな。それが出来ないのであれば、諦めろ」

そう告げるとソウマは学院へ戻るべく、森の中へ消えていった。ソウマの言葉を聞いたコルベールは、沈痛な面持ちでその場に立ち尽くしていた…。

八話目 監視（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございます。

九話目 買物（前書き）

性格等の改変もありますので、ご了承ください。

九話目 買物

上空

「おー！　すげー、空飛んでるよ！」

「サイト、うるさいわよ！　静かにしてなさい！
……なによ折角、馬を用意したのに」

サイトは子供のようににはしゃいでいた。　今、シルフィードの背に乗って空を飛んでいるからだ。
しかし、用意していた馬が無駄になったルイズのご機嫌は斜めだった。

「馬で行く予定だったところをシルフィードに乗って楽が出来たんだから、少しは喜ばないよ。」

それとも、馬のほうが良かったのかしら？
ルイズは『レビテーション』使えないから、落ちたら大変だものね？」

キュルケに言われずとも、風竜に乗れたことは嬉しかった。
だが、ルイズにとってはキュルケと一緒に乗っていることが問題であり、不機嫌になる原因でもあった。
そんなルイズを余所に、キュルケはソウマの腕に抱きつく。

「あまり引つ付くな、本が読みづらい」

「嫌よ、狭いんだから話したら落ちちゃうじゃない」

幾ら竜とは言え、まだ幼体であるシルフィードの背中に五人も乗ると少し窮屈だった。

ソウマも文句は言うが、振りほどこうとは思わない。その態度に甘え、キュルケは離れようとしなかった。

「どうしてこうなった……」

小さくつぶやくタバサの声は風に消され、誰の耳にも届くことは無かった。

本来なら二人で買い物に行く予定だった。

だが、前日にキュルケが加わり、さらに当日になればサイトたちが加わって、気付けば五人で買い物に行くことになっていた。

（ソウマと二人っきりの買い物をする予定が……）

そんな気持ちと共にシルフィードが下降を始める。

「…着いた」

「ずいぶん速かったわね」

「ふん！」

「いやー、気持ちよかったー」

町の近くに降り立ち、皆の想いはそれぞれ違っていた。

「シルフィード、ごきうろつさん。しばらく空で待機してくれ」

頭を撫でながら、シルフィードをねぎらっていた。

嬉しそうに返事をする、シルフィードは翼を広げ再び空へ舞い上がっていった。

「先に武器屋に行く」

ソウマの腕を引っ張り、タバサは街に向かい歩き始める。

キュルケ達も置いて行かれまいと、慌てて追いかけていった。

「「狭い」」

街に入るなり、ソウマとサイトの発した声が重なる。

「何行ってるのよ、ここはトリステインで一番の大通りなのよ？」

大通りとは言うものの、馬車二台通るのがやっとの広さである。

その上、多くの人が行きかい、路上に店を開いている者もいるため余計に狭く感じさせる。

「ゲルマニアはもっと広いわね」

「さ、さっさと武器屋に行くわよ！」

誤魔化すように言うと、ルイズは裏道へと急ぐ。その後をソウ

マ達は呆れた様子でルイズについて行く。

裏道に入ると、こちらをじっと見つめる浮浪者が所々に隠れている。

「ここはスリが多そうだ、あまり長居しないほうがいいな」

「サイト、盗まれないですよ？」

「大丈夫だよ。 ソウマにも鍛えられてるし、早々盗まれないって」

両手に花状態のソウマは身動きが取れそうになかった。 なにせ両腕をふさがれているのだから。

そして、しばらく歩くと剣を模した銅の看板が飾られた建物が見えた。

「あつたわ」

そう言つて、ルイズを先頭に武器屋へと入る。 中は意外と広く、壁や棚に短剣から斧まで飾られていた。

奥のカウンターには店主がパイプをふかしていたが、ルイズ達を見かけるとパイプを置いて営業スマイルを浮べる。

「客よ」

「これは貴族様、うちのような店にいらつしゃるとは珍しい。して、どのような物が御入用で？」

「使い魔に剣を持たせたいの、何かいい剣はないかしら？」

「へい、このバスタードソードなんか如何でさあ？」

店主は貴族の来訪に驚きもせず、落ち着いた態度でルイズに対応していた。

「ツヴァイハンダーにハルバートまであるのか……」

ソウマは店の中を見回し、棚や壁に規則正しく飾られている短剣や長剣、槍等を眺めていた。

飾られている武器には装飾が無い物が多い。

ソウマは抜き身で飾られている、錆び付いた一本の剣に目を留める。

「店主、この剣は？」

ソウマの言葉に、店主の目が怪しく光る。

「へい、残念ですがその剣はナマクラなんですわ。錆びは落ちない、切れ味も悪い、その上「オヤジ、ナマクラはねーんじゃねえか？」…喋りやがるんですよ。面白いもんでさあ」

突然、壁に飾られていた錆びた剣が柄をカチカチと鳴らして喋り、店主に抗議する。

ナマクラと言った店主は、剣を見ながら笑っていた。

「インテリジエンスソードなの？」

「へい、意思を持つ魔剣、インテリジエンスソード。名前をデルフリンガーと言います。」

誰が考えたかは知りませんが、剣に意思を持たせるなんて面白い事をする奴もいたもんです」

ソウマは壁に掛けてあったデルフリンガーを手に取り、錆び付いた剣身を幾つか角度を変えて調べる。

（剣身から錆びが浮いている？

おまけに錆びが付いていない部分は新品に見えるな）

デルフリンガーは何かに気付き、ソウマに向かって話しかけてくる。

「兄ちゃん、おめー本当に人間か？」

それに兄ちゃんはちげーみたいだが、近くに使い手がいた気配がするな」

ソウマは問いに答えず、『使い手』の言葉に反応してサイトを見る。

サイトを近くに呼び、デルフリンガーを渡す。すると左手のルーンが光始めた。

「おでれーた、おめ使い手か！」

「使い手ってなんだ？」

「いいか使い手って言うのはな……なんだっけか？」

カカカ、六千年も生きてると忘れちまうことが多いんだ。

まあ、気にすんなそのうち思い出すだろ、とにかく俺を買え」

呆れた顔で皆はデルフリンガーを見ている。

だが、当の本人は気にした様子もなく、自分を購入させようと勧めてくる。

「わかったよ。ルイズ、これ買っていいか？」

「そんなので良いの？ 錆びてるし、すぐに折れちゃうんじゃない？」

「いや、錆びてるけどデルフは丈夫だと思う」

サイトの言葉に、疑いながらもルイズは渋々承知する。

「しょうがないわね。店主、この剣は幾ら？」

「金貨百枚、それ以上はまかりやせん」

「あら、安いわね。ならこれをお願い」

カウンターに金貨の入った袋を置くと、店主が金貨の数を数える。

「へい、丁度。鞘とこちらはおまけでございやす」

「あら、気前がいいのね」

「いえいえ。デル公、元気でやれよ？」

「おめーもな、オヤジ」

店主はデルフリンガー用の鞘と小型のダガーを取り出す。

サイトはそれを受け取るとダガーを腰に付け、デルフリンガーを背中に背負う。

デルフリンガーを鞘に収める際に「ちょっと待て！」という声が聞こえたが、気にしない。

「ルイズ、ありがとな」

頬を少し赤く染め、「どういたしまして」とか細かい声でルイズは言う。

一方、ソウマは壁に掛けてあったクレイモアを手に取り、カウンターへ置く。

「これでよろしいので？」

店主の言葉に違和感を覚え、聞き返す。

「これ以上の物がこの店にあるか？」

ソウマの返答に店主はニヤリと笑う。

「少々お待ちくださいませ」

店主はそう言い残すと、店の奥へと入って行く。そして、戻ってきた店主の手には大きな剣が握られていた。

先ほどのクレイモアと比べ、長さは同じ位ではあるが、剣身の部分は倍以上ある。

しかし、装飾がなく実用性のみを追求したような武器だった。

「お待たせしやした、こちらの剣になりやす。

この剣の大きさ、重さ、普通の人間にはまともに振れやせんですよ。」

おまけに調べては見たんですが製法も素材も不明なもので、固定化を何重にもかけていやす」

「大きい……けど、ソウマなら振れる？」

ソウマは無言で剣を持つと、その場で剣を振るう。

振り下ろした剣から出る風圧が、タバサやキュルケ達の髪をふわりと撫でる。

両手ではなく、片手で剣を振っている事に全員が驚愕していた。

「店主、この剣の名は？」

「そ、そいつは対人用というより、対竜用に作られたようにも見えるんだあ。」

ですからあつしは竜殺しの剣と呼んでやすドラゴンスレイヤー

「そうか、ならこの竜殺しの剣を貰おう。 幾らだ？」

「元々売り物ではありやせんので、御代は頂けやせん」

「タバサ、今幾ら持っている？」

「剣を買うために持ってきたのは金貨三百枚」

「それを店主に渡してやってくれ」

タバサは頷き、受け取ろうとしない店主に金貨の入った袋を押し付ける。

「店主、また来る」

渋い表情を浮かべる店主に、ソウマ達はそう告げて外へと出て行く。

「いい買い物をした。 で、次は何処に行く予定だ？」

「私とサイトの買い物は終わったから後は好きなところでいいわよ」

「本屋に行く」

裏通りから大通りへと戻り、本屋へと向かう。

到着するとすぐに済むという事でタバサ以外は店の外で待っていた。戻ってきたタバサにキュルケは何の本を買ったのか尋ねるが、幾ら聞いてもはぐらかすだけで、教えてくれなかった。

「それじゃ、学院へ戻りましょ」

キュルケの提案に全員が同意し、シルフィードの待つ場所へ移動する。

街の外へ出てすぐにシルフィードが空から降りてきた。

タバサが本屋に行ってる間に買っておいた干し肉を、シルフィードの頭を撫でながら食べさせる。

「荷物が増えてるが、帰りも宜しくなシルフィード」

「なんかシルフィードがソウマの使い魔みたいに見えるわね。その辺使い魔の主としてどうなのタバサ？」

「問題ない」

全員を乗せるとシルフィードは空に飛び立つ。

「サイト、デルフリンガーと少し話をさせてくれないか？」

「別にいいけど？」

サイトがデルフリンガーを抜くと、

「相棒！ いきなり鞘に入れちまうなんてひでえじゃねえか！」

「ああ、すまん。でも剣は鞘に収めるもんなんだからいいじゃんか」

「話してるところ悪いが、デルフリンガーちょっと聞きたいことがある」

「おう？ なんだ兄「ソウマだ」…ソウマ」

デルフリンガーの声を遮り、名前を告げる。ソウマの威圧に耐えれず素直に呼ぶデルフリンガーだった。

「で、聞きたいことってのは何だ？」

「折角使い手と出会えたんだ、いい加減錆びた振りはやめたらどうだ？」

幾ら六千年たったとは言え、部分的に錆びるなんて事があるはずないだろ？」

「……よく気付いたな？」

相棒もなんとなくはわかってたみたいだが、まだまだだな」

デルフリンガーは剣身から光を放つと、錆びが浮き上がりそのまま消滅する。

「どうでー、相棒？ これが真のデルフリンガー様の姿よ！」

その言葉通り、錆び一つない研ぎたてのような剣身になるデルフリンガー。

見ていたルイズ達は「よかったわね」と平然と告げるだけであつた。

「うーん、最近は驚く事が多すぎて……ちょっと拍子抜けした。まあ、これからも宜しくなデルフ！」

「宜しくできるかぁー！ー！」

サイトの言葉に怒ったデルフリンガーの声が空に響き渡った。

九話目 買物（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

十話目 土塊（前書き）

ずいぶんと長くなってしまいました。

十話目 土塊

夜

「こりゃ、厄介だね……」

フーケは自分の背より大きな宝物庫の扉を見て呟く。
複数人のスクウェアが扉に『固定化』をかけたため、自身の『鍊金』では歯が立たない。

「はあ、アタシのゴーレムでも歯が立ちそうにないよ」

とある人物から扉以外は物理的な衝撃に弱いという情報を得ていた。

実際に見るとゴーレムでも壁を破れない事がわかり、ため息を吐くしかなかった。

（人の気配！？ あれは…、たしかソウマとか言う使い魔だったね。
あんな所で何を？）

フーケは扉近くの影に隠れ、そつと様子を伺う。

「ルイズ、こんな所で魔法の練習か？」

「私が魔法の練習をしてたら悪い？」

ジロリとこちらを睨むルイズの表情は苛立っている様に見える。

「そんなことはない、努力の積み重ねが結果を生むものだ。努力するものを貶す様な事はしない。」

しかし、一つ聞きたい。魔法は失敗すると、爆発するものなのか？」

「違うわ、失敗すると何も起きないわ」

ため息を吐きながら、「ほら」とルイズは自嘲気味に目の前の石ころを見せる。

『鍊金』の対象にしていた石なのか、その辺に落ちている石ころと変わりは無さそうだった。

石を見ながら、ソウマは自分の考えを話す。

「四系統の魔法が全て爆発になる。しかし、爆発は失敗では無い。結論から言えば、四系統以外ではないのか？ もう一つの系統、虚無があるだろう？」

「ふう、何を言うかと思えば……。私が虚無なんて、在り得るわけ無いでしょ？」

呆れた表情を浮かべながら、ルイズは首を横に振る。

「『サモン・サーヴェント』で人を召喚するなんて、本来は在り得ないんだろう？」

しかし、今回は人間であるサイトが召喚された。なら在り得ない事はない…、違うか？」

「で、でも、虚無は伝説の魔法なのよ？ 私なんかが使えるわけがないじゃない」

ルイズは否定するも、動揺は隠せなかった。

「駄目もとで試してみたらいいじゃない？

今度は爆発せずに上手くいくかもしれないわよ？」

声のする方向へ振り向くと、そこにはキュルケとタバサが立っていた。

「キュ、キュルケ？ どうして此处に？」

「偶然見つけたんだけど、接点の少ないルイズがソウマと一緒に何をしてるのかなと思ってね？」

気になったからタバサと一緒に隠れて聞いてたけど、色気の無い話ばかりなんですもの」

両手を上げながら、呆れたようなポーズをするキュルケ。

しばらく哑然とするルイズだが、馬鹿にされている事に気付き反論する。

「い、色気の無い話で悪かったわね！

そつだ！ キュルケ、そんなに言うなら貴方に虚無（仮）の魔法を体験させてあげる！」

「え？ ルイズ！ ちょ、ちょっと待ちなさいってば！」

冗談じゃないと、慌ててルイズを止めようとするキュルケだが、

『鍊金!』

静止も聞かずに、ルイズはキュルケに向かって杖を振る。　しかし、キュルケには何も起こらず無事だった。

代わりに、背後にある本塔から大きな爆発音が聞こえる。

「おかしいわね、ちゃんとキュルケを狙ったつもりなのに……」

再度、杖を振ろうとするルイズを、ソウマが手を掴み止める。
隣ではキュルケが安堵の息を吐いていた。

先ほどの爆発で本塔の壁に小さな亀裂が入っていた。
それを見たフーケはニヤリと笑い、すぐさまゴーレムを『鍊金』
する。

「亀裂を狙いな!」

ゴーレムが亀裂を狙って拳を叩きつける。　するとあっさり壁が崩れ落ち、宝物庫への道が開けた。

即座に中へ入り込むと、フーケは他の物には目もくれず目当ての品を拾い上げる。

フーケは壁にサインをしてゴーレムを置いたまま、宝物庫から逃げ出した。

「『ゴーレム!?!?』」

突如、本塔に現れた全身三十メートル程のゴーレムに全員は驚きの声を上げる。

「タバサ、後は頼んだ」

ソウマは背負っている竜殺しを抜き、ゴーレムに向かって駆け出す。託されたタバサに応える暇は無かった。

しかし、すぐにタバサは口笛を吹いてシルフィードを呼び寄せる。シルフィードが到着する頃には、ソウマがゴーレムと対峙していた。

「無駄にでかいな、術者を叩きたい所だが……そう簡単にはさせてくれないか」

ソウマに気付いたゴーレムは、拳を高速で打ち下ろしてくる。

その巨体に似合わせぬ速度で繰り出す拳を、ソウマは左右に飛びながら避け続ける。

「ふっ！」

攻撃を真上に飛んで避け、そのまま落下の速度を利用してゴーレムの腕に剣で叩き斬る。

腕を失ったゴーレムの動作が一瞬止まったかと思うと、すぐさま腕が再生して元通りになる。

斬り落とされた腕を見れば、既に土へと還っていた。

「再生するのか……、相手するだけ時間の無駄か」

ゴーレムから下がって間合いを取り、持っていた剣を地面にさす。

ソウマは追って来ないゴーレムに向けて両手を突き出すと、

『虚空の風よ、非情の手をもって人の業を裁かん！　ブリザラ！』

魔法を唱え終える。周囲の温度が徐々に下がり、ゴーレムの足、胴、腕、頭と順に凍り付いていく。

ゴーレムには抗う術も無く、その姿を氷像へと変えていった。動けなくなったゴーレムの脇を通り抜け本塔へ入るが、

「ちっ、気配はもう無いか……」

既に人影は無く逃げられた後だった。

「ソウマ！」

「すまん、逃げられた」

「そんな事より、アレは何？」

駆け寄ってきた三人が、そろって氷像となったゴーレムを指差す。ソウマはゴーレムの氷像だと告げるが、三人はそうじゃないと言う。

結局、その日は夜遅くまで質問攻めに遭うソウマだった。

翌日

翌朝、学院長室には教師と目撃者であるソウマ達が集められていた。

「目撃者はこれで全員かね？　コルベール君」

「はい。　サイト君は目撃者ではありません。」

ですが、ミス・ヴァリエールの使い魔ですので連れてきています」

「よいよい。　それにしても、こんな時にミス・ロングビルは何処いたんじゃ」

「そつえば、朝から姿を見ておりませんな」

周りの教師も同じように見ていないと口を揃える。
そこに当の本人が息を切らせて駆け込んで来た。

「お、遅れました。　申し訳ありません」

「おお、ミス・ロングビル。　何処へ行っておったのじゃ？」

「今朝方、宝物庫に賊が入り込んだと騒ぎを聞きましたので、調査していました。」

その甲斐あって、居場所を突き止めることに成功しました」

結果、賊は学院から馬で四時間ほどの森の廃屋に潜伏している事がわかった。

「うむ、それでは搜索隊を編成する。　我こそはと言う者は杖を掲

げよ」

しかし、誰一人として杖を掲げようとする者はいなかった。
オスマンは教師達を見るが、皆そろって目をそらす。

「このままでは時間の無駄だ、俺が行こう」

「な！？ つ、使い魔如きが勝手に口を開くな！」

「はっ、魔法がなければ何も出来ない連中に、文句を言われる筋合
いはない。」

それとも、代わりにアンタ等が行くか？」

途端に口ごもる教師達を、ソウマは鼻で笑う。

「私も行く」

「なら、私も行こうかしらね」

「私も行くわ！」

タバサ、キュルケ、ルイズが次々と杖を掲げる。

「うむ、ならばお主達に任せよう」

オスマンは頷くと、教師達を部屋の外へと追い出す。
追い出されたのはコルベール、ロングビルを除く教師達だった。

「すまんのう。 本来なら教師の役目なんじゃが、如何せん自尊心
だけしかない連中じゃて」

「別に構わない。それより、盗まれた物の詳細を教えてください」

謝罪するオスマンに対して説明を促がすソウマ。

「うむ、名前は『破壊の杖』、普段はケースに入っておる。
ケースの中身は茶色い筒状の杖での、全長は大体三十センチ位じや」

「それだけ分れば十分だ、準備が済み次第向かう」

搜索隊のメンバーが決まり、皆準備のために部屋へ戻っていった。

正門前

正門前には搜索隊メンバー全員が集まっていた。

「目標は『破壊の杖』の奪取。お主等の働きに期待しておる。
しかし、死ぬ事はまかりならん、必ず生還する事じゃ。では、
幸運を祈る」

オスマンに見送られ、全員が屋根の無い馬車に乗り込む。

そして、ロングビルを案内人として搜索隊が出発する。

しばらく馬車に揺られていると、キュルケが独り言のように呟く。

「それにしても、ソウマが魔法使えるなんて……」

「えっ！？ ソウマは魔法使えるのか？」

昨夜、その場にいなかったサイトが驚く。

「まあな、メイジでは無いと言ったが、魔法が使えないとは一言も言っていない」

「そう言えばそうだな。 ならさ、ソウマはどんな魔法が使えるんだ？」

「火、水、氷、土、風、雷、毒、聖、闇の魔法は大体使える。

他に特殊な魔法もあるがな……」

サイトを除いた全員は開いた口が塞がらない。

ハルケギニアには属性が虚無をあわせた五つしか存在しないため、驚くのは当然だった。

「聖と闇……、聞いたことない。 どんな魔法？」

「使う機会があれば見せてやる。 それまでは我慢しろ」

「わかった」

納得の言葉を口にするが、表情と一致していないタバサであった。

突然、馬車が動きを止める。

「皆さん、ここから歩いて少し行った所に廃屋があります」

ロングビルが指差す方向にはうつそうとした森が広がっていた。一行が森の中を歩いていると一軒の廃屋が見える。とてもじゃないが、人が住んでいるようには見えなかった。

「申し訳在りませんが、私は馬車のところまで避難させて頂きますね」

「ええ、案内ありがと」

ロングビルは一礼すると、来た道に戻っていった。

「サイト、俺は周囲を偵察してくる。廃屋の方は頼んだ」

「え？ ちょっと、ソウマ！」

サイトの呼びかける声がむなしく響く。ソウマは既に森の中へと消えていた。

「私達は空から援護する。 サイトは廃屋を見てきて」

声は後ろではなく空から聞こえる。

見上げると、タバサ達はシルフィードに乗って空を旋回していた。

「俺一人かよ……、トホホ」

デルフリンガーに手をかけながら、慎重に廃屋へと近づいていく。はやる鼓動を抑え、扉をそっと開く。中を除くが、そこに人影らしき者は見当たらなかった。

「ふう、誰もいないじゃんかよ」

扉をくぐり、置いてあつたケースに手を伸ばす。

しかし、手に取った拍子にケースが開き、中身が地面に落ちる。

慌てて拾い上げると、『破壊の杖』の情報が頭に入り込んできた。

「これは……、M72型のロケットランチャー？　なんだってこんなのがこの世界に？」

初めて自分の世界に有る物と出会うが、それは対戦車用の武器だった。

考えていても仕方ない、そう思つて中身を戻してケースを手にする、その時だった……。

「サイト！　逃げて！」

悲鳴にも似た声に反応して、扉から勢いよく飛び出る。

しかし、そこにはゴーレムが待ち構えていた。

「やべえ！？」

ゴーレムがサイト目掛けて拳を振り下ろすが、サイトは飛ぶように転がり、何とか避ける。

「援護するから、そのうちに下がって！」

さらに攻撃を仕掛けようとするゴーレムに向かって火球と風の刃が降り注ぐ。
ファイアボール・生ア・カタ

その攻撃はゴーレムを一瞬止める程でしかない。　しかし、サイ

トにとってはその一瞬で十分だった。

「ありがてえ！」

急いで立ち上がり、ゴーレムから距離を取る。剣ではダメだと判断したサイトは、

ケースからM72型のロケットランチャーを取り出すと、ゴーレムを狙って構える。

サイトはゴーレムが自分の方を向く瞬間を狙い、トリガーを引く。

「みんな！ 耳をふさげ！」

耳をつんざく様な轟音と共に、大きな爆発がゴーレムを襲う。

爆発によって起きた煙が晴れると、そこには上半身が吹き飛んだゴーレムの残骸があった。

その光景を木の影から見て、笑みを浮かべる一人の人物がそこにはいた……

「ふうん。『破壊の杖』は、ああやって使うのかい……」

ガキ共が来る事になった時はどうなるかと思っただけ、結果としてよかったね」

『破壊の杖』を奪ったはいいが、使い方が分らない。

用途の不明な物は高く売れないため、フーケは使い方を知るものを呼び寄せたつもりだった。

「残念ながら、お前の思い通りには行かないかな？」

おっと、そのまま動くな。動いてもいいが、首と胴が別れを告げる事になるぞ」

突然背後から聞こえる声に焦るフーケ。

「なんだい、アンタ少女達と空にいたんじゃないのかい？」

「いいや？ お前が馬車へ戻ろうとする所から、ずっとつけていたのさ」

フーケは愕然とする。 始めから見抜かれていた？そんな思いがフーケの頭を巡る。

「アタシをどうする気だい？」

「三つの選択肢をお前にやろう。 一つ目はこの場で俺に殺される。二つ目は捕まって処刑される。 三つ目は俺に従って生を得る。さあ、どれがいい？」

「くっ、選択の余地なんてありやしないじゃないか。 三つ目を選ぶよー！」

毒づくフーケだが、未だ死ぬわけにはいかない。 渋々、従う方を選ぶ。

（何、この男から逃げちまえばこっちのもんだ。 さっさと身を隠させて貰うよ）

そんなフーケの心を読み取ってか、ソウマは抑えていた殺気を開放する。

「逃げたければ逃げてもいいが、その時は楽に死ねると思うなよ？」

フーケは殺気を感じるなり、周囲の温度が下がっていくのがわかる。

そして、気付けば自分の手足は振るえ、息苦しさを感じるほどであった。

（逃げる？ 冗談じゃない、そんなの無理だ。たとえ地の果てへ逃げててもこの男は追いかけてくる！）

そう思わせるほど、ソウマの声には殺気が込められていた。

「安心しろ、俺に従う限りはお前も守ってやる」

フーケを取り巻く殺気が消え、先ほどとは逆の暖かい空気がフーケを包み込む。

安堵の息を吐くと共に、フーケは意識を手放した。

「おっと、少し刺激が強すぎたか」

フーケを両手で抱え、その場を後にする。馬車に戻ると、タバサ達が『破壊の杖』を携えて待っていた。

「ソウマ！ ミス・ロングビルに何があったの！？」

「すまない、ロングビルを人質に取られてフーケに逃げられた」

即座に嘘をつくが、周りに疑うものはいなかった。

「全員無事、『破壊の杖』も取り戻した。問題なし、学院へ戻る」

タバサの言葉にその場にいた全員が頷く。

全員が馬車に乗り、ソウマが手綱を取って森を後にした。

十話目 土塊（後書き）

まだまだ続きますので、楽しんでいただけたらと思います。

長さについて、下記の通りになっています。

サント＝センチ

メートル＝メートル

十一話目 帰還（前書き）

今回も長めです。

内容的には薄いかもしれませんが。

十一話目 帰還

目を覚ますと、目の前には星空が浮かんでいた。

「ここは……？」

周りを見渡しながら起き上がると、そこは馬車の上だった。起きたばかりのせいか、頭がはつきりしない。

「ミス・ロングビル、もう起きて大丈夫なの？」

横には自分の事を心配そうに見つめるルイズがいる。

自分が「ロングビル」と呼ばれた事で、フーケだとばれていない事を理解する。

「ええ、もう大丈夫です。ご心配をお掛けしてすみません。ところで、私はどの位寝ていたのでしょうか？」

「あの森から出発して四時間位かしら？」

ソウマが手綱を握ってるから、少し速度が遅いのよ」

「すまん、揺れを減らすために速度を下げていたんだ。

しかし、ミス・ロングビルも災難だったな。まさかフーケの人間にされるとは思わなかった」

ソウマの名前、そして声を聞き、本人の意思とは無関係に体が震

えだす。

同時に息も乱れ、上手く呼吸ができない。

「ミス・ロングビル、体が震えてるじゃない。

人質に取られた事がそれほど怖かったのね、もう少し休んだ方がいいんじゃない？」

「い、いえ、大丈夫です。これ以上、ご心配をかけるわけにはいきませんから」

なんとか呼吸を整え、震える体を手で押さえながら立ち上がる。そして、おぼつかない足取りでソウマの隣へ移動する。

「と、隣、失礼しますね」

ソウマの隣に座って気付く、反対側にはタバサがソウマ腕に抱きついていた。

目を瞑るタバサは眠っているのかわからない。しかし、嬉しそうな表情を浮かべていた。

そんなタバサを見ていたせいか、いつの間にか体の震えが止まっていた。

（で、アタシは何をすればいいんだい？）

（トリスティン、アルビオンの情報収集を頼みたい）

（わかったよ。だけど、そんな事だけでいいのかい？

もっと、危険な事をやらされるかと思ってたけど……）

命がけの盗みをした事もあるフーケ。

しかし、内容を聞けばそれは拍子抜けしたモノだった。

（そついうのがお好みか？）

（そ、そんなわけ無いさ。ただ、気になってね）

（俺はこの世界に来て日が浅いからな、情報は出来るだけ集めておきたいだけだ）

（わかったよ、時間の許す限り調査するさ。

それと、アタシのことはマチルダって呼んどくれ）

言い終わるなり、ソウマの膝を枕代わりに寝転がる。

（少し、眠らせてもらうよ）

ロングビルは疲れていたのか、すぐに寝息を立て始めた。

そして後ろの荷台を見れば、他の連中も気持ちよさそうに寝ている。

（やれやれ、気分は家族旅行帰りの父親か……）

学院に到着するなりコルベールが駆け寄ってくる。
夜でも月明かりによって光る頭が眩しい。

「皆さん、ご苦労様です。」

首尾の方はいかがでしたか？」

「フーケには逃げられたが、『破壊の杖』は奪い返す事に成功した」
荷台からケースを持ち上げ、コルベールに渡す。

思っていた以上に『破壊の杖』が重かったのか、コルベールは一瞬落としそうになる。

「では、私の方で責任持つて預かりますので、今日は各自部屋に戻って休んでください。

明日の朝、皆さんは学院長室に集まってください」

言い終えると、コルベールはケースを持って本塔へ戻っていった。
少しふらついている様にも見えたが、大丈夫だろう。

「いい加減起きろ、学院に着いたぞ」

「は、はい。 すみません」

「眠い」

「もう朝なの？」

「ちい姉さま、もう少しだけ」

「ふああ、よく寝た」

すぐに起きるロングビル、タバサとは対照的に、寝ぼけた事を言うキュルケとルイズ。

その中でもサイトは早く起きるわけでもなく、寝ぼけるわけでも

ない。

「サイト、ルイズを運んでやれ」

「あいよ」

お姫様抱っこの要領で持ち上げるサイト。

そんな状況でもルイズは未だ夢の世界に旅立っていた。

「今日はこれで解散だが、明日の朝に学院長室へ集合だそうだ。
忘れるなよ」

皆それぞれの部屋へと戻って行く。その場にはソウマとタバサが残っていた。

すると、タバサの元に一匹のフクロウが飛んてくる。

タバサはフクロウの足に巻かれた手紙を取り、中身を確認する。

「任務」

「内容は？」

「わからない、明日の昼に宮殿に来いとしか書かれてない」

そこでタバサは少し思案する。既に母を救い出したため、従う理由はもうない。

だからこそ刺客が来る事はあっても、仕事の依頼が来るとは思っていないかった。

「そうか、お前はどうしたい？」

「母様を取り戻した以上、受ける必要ない。

けど、このまま放置すると学院に何かしてくるかもしれない……」

相手の考えが読めず、不安だけが心に残る。

しかし、そんな不安を打ち消す言葉がソウマからかけられる。

「なら、受ければいい。 何があっても俺が君を守ろう」

「うん」

首を縦に振り、そっとソウマの手を取って握る。

握り返してくるソウマに対し、穏やかな笑顔を浮かべるタバサ。

「さて、俺達も戻ろう」

二人は手をつないだまま、部屋へと戻っていった。

翌日

学院長室に捜索隊のメンバー全員が集まっていた。

「ふむ、フーケに逃げられたのは残念じゃった。

しかし、よくぞ『破壊の杖』を取り戻してくれた。 これで一件
落着じゃ」

オスマンは無事を喜び、全員の顔を順に見ていく。
そしてニヤリとほくそ笑み、オスマンは話を続ける。

「君等の功績を称え、『シユヴァリエ』の申請しておいた。
と言いたい所じゃがのう。」

フーケには逃げられてしまった事もあるのでな、精霊勲章の授与
を申請しておいた」

途端にルイズとキュルケの表情が笑顔になる。
それを見て、オスマンも自然と笑顔が綻ぶ。

「オールド・オスマン、サイトとソウマ、それとミス・ロングビル
には何も無し？」

タバサに言われ、オスマンは少し困った顔をする。
逆にロングビルは自身がフーケであるため、複雑な表情を浮かべ
ていた。

「あー、何と云うかのう。 三人は平民じゃからの、勲章の申請は
できぬ。」

代わりにミス・ロングビルは賃金を上げよう。
そして、二人にはワシのポケットマネーで報酬を払おう」

予め用意していたと思われる金貨の袋がサイトとソウマに手渡さ
れる。

中身を確認すると大体千エキュール程が入っていた。

「良かったわね、サイト」

「ああ、ただこの金貨はルイズが預かっててくれ」

金貨の袋を渡すサイト。

ルイズはサイトと袋を交互に見る。

「いいの？　これはサイト個人のお金になるのよ？」

「んー、信頼の証だと思ってくれればいいさ」

ルイズは一瞬呆気にとられながらも承知する。

「わかったわ、しっかり管理してあげるんだから」

嬉しそうな表情を浮かべ、金貨の袋を抱きしめる。

傍らで、ソウマが金貨の袋を道具袋に仕舞う。

それを見たタバサが少し寂しそうな表情になる。

「うむ、それではこれで解散とする。　それと、今日は君等は授業に出なくて良い。」

ゆっくり休み、夜は『フリッグの舞踏会』を楽しみなさい」

全員が部屋を出て行く中、ソウマ、サイト、タバサが部屋に残っていた。

「タバサ、先に行って準備をしてくれ。　すぐに行く」

タバサは頷き、その場を後にする。

「ふむ、何か聞きたいこともあるのかね？」

「ああ、ある。『破壊の杖』は一体どこで手に入れたんだ？
これは元々俺の世界で作られた武器に間違いない」

サイトの世界で作られた武器と聞いて、オスマンは話して良いものかと悩む。

あれほどの威力ある『破壊の杖』が、ハルゲキニアで作り出されれば戦争は必至。

真意を探るためにもサイトに聞き返す。

「お主は『破壊の杖』をなんだか知っておるのか？」

「これは『破壊の杖』の名前は『M72 LAW』、使い捨ての対戦車用ロケットランチャー。」

そいつは旧式だが、後継機が現代でも用いられている。用途は少し変わってきているがな」…え？」

オスマンにとっては予想外の方からの説明だった。

サイトもソウマが知っているとは思わず、驚いた表情を浮かべる。

「ソウマ殿、お主はサイト殿とは別世界から来たと聞いておる。
それなのに、何故お主はサイト殿の世界にある武器を知っているのじゃ？」

先ほどの笑顔とは打って違って険しい表情のオスマン。

手に持つ杖からは今にも魔法が解き放たれんばかりの魔力が込められていた。

しかし、それを気にも留めず言い放つ。

「それは、俺がサイトと同じ世界の元住人だからだ」

「な、なんと……」

オスマンは目を見開て愕然としていた。
しかし、確かに言われてみれば納得である。
同じ世界にいたのであれば知っていても不思議はない。

「ソウマは何人だったんだ？」

「サイトと同じ、日本人さ。普通の一般家庭に生まれ、そして死んだんだ……。
そう、夜も更けた会社帰りに、車や人通りの無い横断歩道を渡った所を跳ねられてな」

ソウマの言葉に違和感を覚える。
安全を確認した道路で何かにぶつかるものか？
そんな事、あるわけがない。

「何に跳ねられたか覚えてないのか？」

「ああ、俺にもわからない。しかし、それとは別にわかった事がある。

俺は死に、よく知る世界へ転生したという事だ」

「転生つて、死んだら生まれ変わるってやつか？
それに、よく知る世界つてまた日本人に生まれ変わったのか？」

ソウマは首を横に振って否定する。
では、日本以外の国の人間に生まれ変わったのだろうか？
先を聞くために沈黙を保っていると、ソウマが口を開く。

「ゲームの世界だよ。」

「ご丁寧に、日本人だった頃の記憶をおまけ付でな」

苦虫を噛みつぶしたような表情を浮かべるソウマ。

ゲームの世界に転生した事……、どちらが嫌だったのかはわからない。

いや、両方が嫌だったのかも知れない。

「ソウマは何が嫌だったんだ？」

俺はゲームの世界に転生したら大喜びすると思っけど……」

そう、ゲームの世界に入れるなんて憧れに近いことだ。

自分だったらと想像した事は何度もある。

そんな考えを察してか、ソウマは続ける。

「サイトにとって、このハルゲキニアの世界をどう思う？」

「この世界？ うーん、面白いとは思わないな。」

貴族と平民だけじゃなくて、魔法の有無でひどく差別されるしな」

隣で聞いているオスマンはバツの悪そうな表情を浮かべている。

別世界から来たサイトの意見に対し、申し訳なく思っているのだろつ。

「結局のところ、サイトの想像してるゲームの世界もこの世界と変わりない。」

違っつのは魔王がいない事位じゃないか？」

「魔王がいればこの世界もゲームの世界と変わらない……。」
言われてみればそうか、この世界には魔法もあるし」

ゲームの世界と変わらない、その言葉にサイトは納得しているようだ。

オスマンは隣でなにやら気難しい顔をしている。理解が追いついていないのだろうか。

「サイトもゲームの世界に転生してみたいか？」

意識も記憶もある赤ん坊の姿で、魔物のいる森に捨てられてみたか？

死ねばまた別の世界へ転生する。そんな人生を味わってみたいか？」

「い、いや、遠慮しとく」

慌てて両手を振るサイト。どうやら想像していたものと違ったらしい。

悪い面ばかり押し付けられれば誰でも遠慮するだろう。

しかし、良い面もあることにはあった。それは……、

「だがな、死んで別の世界へ転生しても、前の世界の魔法や技は使えた。

それが唯一の救いと言えるところだな」

「てことは、記憶はずっと残ったままなのか？」

「そうだ。だからこそ、俺にはまだ日本人の頃の記憶が残っている」

サイトは「納得した」と一言。

その隣でオスマンがアゴに蓄えられた白い髭をさすっている。

その表情から察するに、まだ納得をしきれていないようだ。

「ふむ、荒唐無稽な話だと一蹴したいところじゃが……。
ソウマ殿に秘められておる魔力は常識を逸しておる。一概にほ
ら話とは言えんのう」

「別に信じる必要は無い、知識として持っていればいい。
信じたからと言って、何かを得られるわけでもないしな」

「そう言ってくれるとありがたい」

全ては信じる事から始まるとは言うが、突飛過ぎる話はさすがに
信じられん。

しかし、話を聞くにソウマ殿は敵対するつもりは無さそうじゃ。
下手に藪をつついて蛇…、いや魔王が出てきてもたまらん。 穩
便に済ませられればありがたいの。

「さて、時間も惜しい。

『破壊の杖』を手に入れた経緯を教えて貰おうか、オスマン殿？」

「うむ、かれこれ三十年も前の話での、私は森の中でワイバーンに
襲われたんじゃ。

その時に救ってくれたのが、『破壊の杖』の持ち主じゃ。
しかし、持ち主はワイバーンに受けた傷が元で死んでしまったが
のう」

大きく息を吐いて椅子に座りなおすオスマン。

その表情は少し暗い。 責任を感じているのだらう。

「その持ち主の遺品等はあるか？」

「うむ、小さなかばんに入れて宝物庫に入れてある。

『破壊の杖』と似たような物もあることじゃし、宝物庫への立入りを許可しよう。」

「もう一つ、図書館の奥にある書庫の立入り、閲覧の許可を貰えないか？」

「理由を聞かせて貰えるかの？」

オスマンは警戒している様子は無い、単に興味本位で質問しているのだろう。

特に隠す必要もない、話すか。

「一つは『遠見の鏡』の資料を探す事。
それともう一つ、元の世界へ帰る為の資料を探すためだ」

「ふむ、良いじゃろ。しかし、遠見の鏡ならワシが既に持っている。

こちらの貸出しも合わせて許可しよう。必要になったらいつでも尋ねてきなさい」

「礼を言う」

「何、礼を言うのはこちらのほうじゃ。

そうじゃ、『破壊の杖』の持ち主が死ぬ間際に呟いてた言葉があるんじゃ。

「戦場へ戻らねば。ソウマ、待っている」とな……、何か心当たりはあるかの？」

「さて…、同じ名前の人間なら他にもいるだろう。

それに遺品を確認してみない事には、なんとも言えないな」

それだけ言い残し、ソウマは『テレポ』でタバサの元へと移動した。

残ったのはオスマンとサイト、二人はソウマがいた場所をジッと見つめていた。

「のう、サイト殿。君はソウマ殿をどう思う？」

「触らぬ神に祟りなし……、かな？」

「ほっほっほ、まさにその通りじゃて」

二人は安堵の息を吐き、笑い続けた。

十一話目 帰還（後書き）

毎度読んでいただきありがとうございました。
今回から簡単な解説を入れていきます。

【魔法解説】

テレポ：短い距離を一瞬で移動する転移魔法。

十二話目 悪魔

空

タバサ達はシルフィードの背に乗り、ガリアの城へと向かった。

そんな中、タバサは『ハルケギニアの多種多様な吸血鬼について』と書かれた本を読んでいた。

本のタイトルから、興味を持ったソウマが尋ねる。

「この世界にも吸血鬼はいるのか？」

「いる。太陽の光には弱いけど、普段は人と見分けがつかない。それに、先住魔法を使ったり、血を吸った相手一人を屍人鬼^{グール}として自由に使役できる。

だから一度村に入り込まれると発見するのが困難」

「太陽の光以外に弱点はないのか？」

「弱点は他にもあるかも知れない。

けど、この本には載ってないからわからない」

吸血鬼の弱点は太陽の光。それはどの世界でも共通の弱点だ。であれば……、他の世界と同様に聖水や十字架の効果があるかもしれないな。

会う事があれば、試してみるか。

「で、今回の相手がその吸血鬼なのか？」

「そう、出発の準備中にまた手紙が来た。

今回の相手は吸血鬼、それだけ書かれてた」

そう言うとタバサは本に目を戻す。

ソウマもシルフィードの背に寝転がり目を瞑る。

「着いたら起してくれ」

ソウマは言い終わるなり、すぐに寝息を立て始めた。

その頃、ガリアの城の一室で、タバサの来訪を待ち望む一人の少女がいた。

名をイザベラ。現ガリア王ジョセフの娘である。

「あのガーゴイルはまだ来ないのかい？」

傍に控えている侍女が首を振る。

「まだお見えになっておりません」

「そうかい。　ククク、それにしても楽しみだねえ。

きつと、震えながらやって来るに違いないわ」

そっけなく答えたかと思うと、途端に笑い出すイザベラ。

その姿を見て、苦笑いを浮かべる侍女たち。

「シャルロットさまがお見えになりました」

同時に部屋の扉が開き、シャルロットと大きな剣を背負った男が一緒に入ってくる。

タバサの姿は予想と違い怯えた様子は無かった。

しかし、それよりも目を引かれたのは、タバサの横にいる男の方だった。

「アンタ誰だい？」

惹き込まれそうな黒い瞳、同様の髪色、そして大人びた顔立ちを見せるソウマ。

百八十センチ程あろう身長と背負った剣の大きさに比べ、いささか細身の印象を受ける。

マントこそ羽織っていないが、その姿は貴族とも見える。

イザベラはタバサそっちのけでソウマに尋ねていた。

「私の名は月影 双馬。 職業は傭兵でしたが、今はシャルロットの使い魔をやっております。」

以後、お見知りおきをイザベラ王女」

膝をついて頭を下げるソウマ。

淀みのない立ち振る舞いに、イザベラは思わず見惚れる。

その周りにいた侍女達もソウマに心を奪われていた。

「ふ、ふん、平民のようだけど。
礼儀はわきまえてるみたいだね」

イザベラは言葉とは裏腹に頬をほんのりと染める。

本なら人間の使い魔を召喚したタバサを貶すつもりでいた。しかし、そんな事も忘れて視線はソウマに釘付け状態だった。

「任務」

「え？ あ、ああ」

ソウマに見惚れていたイザベラは、慌てて目的地などが記されている書簡を手取る。

タバサに手渡す際、何かを誤魔化すかのように尋ねる。

「そ、そうだ！ アンタ、今回の相手が吸血鬼だってわかってるのかい？」

「知ってる」

「そ、そうかい……」

頭の中は既にソウマの事で一杯になり、イザベラはその言葉を発するだけで精一杯だった。

惚けているイザベラ達をそのままに、タバサ達は一礼して退出する。

それをボーっとしながら見送るイザベラ達、正気を取り戻したの時は既に夜であった。

シルフィードの背に乗り、目的地へと二人は向かう。
行き先はサビエラ村、人口が三百人程度の山間にある村、

タバサはそこに行くようシルフィードに指示を出す。
そして……、

「イザベラと侍女達に何したの？」

「扉を開いた時点で、ハートを盗むチャームを使った。

簡単に言えば、異性を一時的に惚れた状態にしたのさ」

「私に使った事は？」

「ない」

首を横に振って否定するソウマに対し、タバサは安堵の息を漏らす。

同時にソウマの力に、その強さだけでなく多様性に不安を覚える。
だが、母を救ってくれたソウマを今更疑うような真似はしない。
そんな事を考えていると、

「吸血鬼の対策についてなんだが、聖水を使おうと思う」

「……聖水？」

「ああ、元の世界じゃ吸血鬼に効果があつた道具だ。

この世界で通用するか知らないが、試してみる価値はあるだろう？」

「そんな物が「すごい」のね！ 兄様の世界にはすごいものがあるのね！ きゅいきゅい！」

タバサの言葉を遮り、突然会話に入ってくるシルフィード。

本人曰く、最近会話が少なかったため、喋りたいとの事だった。

「シルフィードは吸血鬼を知っているのか？
詳しく知っているなら、是非とも教えて欲しい」

「城に行く前に話してた事位しか知らないのね。
でも、兄様がいればきっと大丈夫なのね！ きゅい！」

二人は何の情報もない事にしばし沈黙する。
が、直ぐに気を取り直して吸血鬼の対策を練る。

「それでは、ソウマが私で私がソウマで……」

「ああ、俺がタバサでタバサが俺で……」

「何言ってるのかわからないのね！
シルフィにもわかりやすく言うのね！」

「つまり、お互い入れ替わるって事」

「最初からそう言うのね！ きゅい！」

二人は怒っているシルフィードをなだめ、準備に取り掛かる。
ソウマはタバサのマントを羽織り、杖を借りる。　そうして準備
を終えると村が見えた。

ソウマ達は少し離れた場所に降り立つ。

「舞踏会に間に合わせるためにも、手短かにすませる」

「慎重にお願い、ソウマが屍人鬼になったら手がつけられない」

「そうだな、気をつけるとしよう」

村の入口に着くと、一人の男が現れる。

男は村長の使いだと言い、ソウマ達を村長の家まで案内してくれた。

扉を開けて中に入ると、村長と思われる白髭の老人が立っていた。

「よくぞいらっしました。 騎士様」

深々と頭を下げる老人。

「村長、頭を上げてよい。 私はガリア花壇騎士、ヴラド・ツエペシュ。」

吸血鬼事件の詳細を教えてくださいただけるか？」

「は、はい。 ですが、ヴラド・ツエペシュとは……？」

「詮索は不要。 お前は聞かれたことだけに答えればよい」

「こ、これは失礼致しました」

ソウマに先を促がされ、村長は説明を始める。

発端は二ヶ月前に十二歳の少女が犠牲になったこと。

それを皮切りに今現在で九人の犠牲者を出していること。

「犠牲者の中には派遣された騎士様もいらっします。

村に着いてから、僅か三日で吸血鬼にやられてしまいました
ですから、その……」

「大体理解した、だが心配は無用。
村長、今から指示する事を一時間以内に実行しろ」

指示を出してから一時間後。

村の中央広場には三人の男女が集められた。

彼等は村に引っ越してきてから一年未満の人々だった。

「これで全部か？」

「い、いえ、後二人。 占い師の女性とその息子のアレキサンドル
がおります。」

ですが、アレキサンドルの母親のほうに病気でして、外に出れない
ということです」

「そうか、ならアレキサンドルだけ連れて来い。
母親のほうは俺が後で調べる」

「はい。 すぐに連れてきます」

しばらくして連れてこられたアレキサンドルは不機嫌そうな表情
を浮かべていた。

母親を連れ出さない事を条件に、渋々ついて来たのだろう。

ソウマは四人の前に立ち、命令する。

「これから簡単な検査を行う。 四人とも手を出してもらおう」

その言葉に四人が恐る恐る両手を前に出す。

一人ずつ、瓶入った聖水を手のひらに垂らしていく。

そんな中、広場に集まった村人達はその光景を頑に見つめていた。

「騎士様、これは……？」

「気にするな、ただの水だ」

そんな会話をして、最後にアレキサンドルに聖水を垂らした時だった。

「熱ッ！ な、なんだあ、こりゃあ？」

突然、手のひらに熱を感じ慌てるアレキサンドル。
ソウマは聖水を袋に仕舞うなり、別れを告げる。

「さよならアレキサンドル」

「ちょ……」

言い終わる前に、ソウマの剣が振り抜かれていた……。
アレキサンドルが頭から真っ二つになり、大量の血を噴出しながら倒れる。

その光景を見ていた二人が途端に悲鳴を上げる。

「ひ、ひいい！ わ、私は吸血鬼じゃありません！」

「わ、私もです！ 吸血鬼ではありません！」

「安心しろ、先の聖水は吸血鬼のみに反応する。
反応しなかったお前達は人間だ、よかったな？」

一人は失神していたため、村人に運ばれていった。

ソウマは剣を背負いなおし、袋から油袋を取り出し遺体にかける。油袋をタバサに持たせ、左手で地下水を掴み、右手にあるタバサの杖を振る。

『ウル・カーノ』

《ゴォウ！》と激しい音と共に炎が立ち昇る。油のかかった遺体は勢いよく燃え、五分足らずで灰となった。

「村長、アレキサンドルの家を確認して来い。」

アレキサンドルの母親が死んでいれば、家ごと燃やせ」

「わ、わかりました。それで騎士様は？」

「少し休ませてもらう。村長、部屋を借りる」

ソウマ達はさっさとその場を後にする。

村長の家にたどり着き、扉を開ける。その先に一人の少女が立っていた。

少女から臭いが漂っている。それは、よく知っている臭いだ……。

「私はエルザ。お兄ちゃん達、誰？」

「ヴラド・ツエペシュ、君を殺しに来た騎士さ」

「えっ？」

驚きの表情を浮かべるエルザにソウマは杖を向ける。

エルザは後ずさりながら弁解の言葉を口にするが……、

「わ、私は吸血鬼じゃない！」

「誤魔化しは無駄だ。お前の口から血の臭いしかない」

「くっ！ 人間の癖に！」

エルザは一瞬屈むと即座に床を蹴り、ソウマに向かって猫のように飛ぶ。

瞬く間に距離が近づく、並みの人間であれば噛み付かれていたであろう。

しかし、エルザにとって相手が悪すぎた。

「な、何！？」

ソウマの首筋に噛み付く直前で止まってしまう。

首根っこを誰かに捕まっている。見ればそれはソウマの手だった。

エルザは暴れ、何とか手を振りほどこうとするがびくともしない。

「は、離して！ 何？ 何がいけないの？」

人間は生きるために牛や豚を殺してる！

なら、吸血鬼が生きるために人間を殺して何が悪いの！？」

「勘違いするな？ 人間を殺す事が悪いんじゃない。

悪いのは人間じゃないお前が、人間より弱かった事だ」

《ゴギヤ！》という鈍い音と共に骨が折れる音がする。

ソウマの手に捕まっていたエルザの首が握りつぶされていた。力なく垂れ下がるエルザの手足。

「後は処分して終わりだ。

タバサ、シルフィードの場所に向かうぞ」

「うん。 けど、それ何かに隠したほうがいい」

「そうだな、『バニシュ』……、これでいいか？」

「……すごい、でもそれなら大丈夫」

ソウマが魔法を唱えると、死体は見えなくなってしまった。
見えなくなる瞬間を見ていたタバサは、信じられないといった表情をしていた。

シルフィードの場所に着く頃には魔法が解けていた。 同時にシルフィードも降りてくる。

「早かったのね。 きゅい！

あれ？ 兄様、それなんなのね？」

「吸血鬼の死体だ。 食べるか？」

「た、食べないのね！

なんで死体を持つてるのね！」

「処分するためだ」

慌てるシルフィードを余所に、ソウマは死体を放り投げる。
タバサから油袋を受け取り、死体に振り掛ける。

『ウル・カーノ』

アレキサンドルの時と同じように炎が舞い上がる。

エルザの死体も五分ほどで灰になった。　ソウマはその上からさらに聖水を振りまく。

その光景をタバサとシルフィードは不思議そうに見ていた。

「何してるの（ね）？」

「とある世界の話だが、死んで灰になった吸血鬼は蝙蝠になって復活するらしい。

だから、念のためにな」

「そんな話、聞いたことないのね。

兄様の話は不思議なモノばかりなのね。　きゅい」

「ハルケギニアの世界の話ではない、知らなくて当たり前だ」

いつか読んだ本を思い出しながら、聖水を袋に仕舞う。

タバサとシルフィードは顔を合わせながら首をかしげていた。そんな二人に声をかける。

「さて、学院へ帰るとしよう」

「報告が先」

「報告は監視者に任せればいい。　後は書面で伝えておけ」

「…わかった」

ためらうタバサを無理やり納得させる。

折角、監視してくれているんだ、報告はそいつに任せてやらないとな。

それに今回の事で、しばらくは任務もないだろう。
そう考えながらソウマ達は村を後にした。

十二話目 悪魔（後書き）

なかなか上手くかけませんが、
読んでいただきありがとうございます。

【魔法解説】

バニシュ：FF？に登場し、効果は対象を透明する魔法。

チャーム：魔法ではなく、『ハートを盗む』というアビリティ。

効果は対象を誘惑して味方に引き込む。

十三話目 疾風（前書き）

あまり上手く書けていませんが、ご了承ください。

十三話目 疾風

アルヴィーズの食堂の上の階は、大きなホールになっている。

『ブリッグの舞踏会』はそこで行われていた。

そして、ホールに繋がるバルコニーにソウマとサイトはいた。

「ソウマ、今日は何処行ってたんだ？」

「ちょっとそこまで、ドラキュラ退治にな」

「へー、ドラキュラ退治にねえ……ってドラキュラがいるのか！？
しかもちよつとそこまで行けば会えるのか！？
でも、あれって架空の生物じゃなかったっけ？」

「サイト……、今お前のいる世界は何処だかわかっているか？」

呆れて聞き返すと、サイトは納得の顔をする。

「相棒、ドラキュラってなんでえ？」

「デルフは知らないのか？
ドラキュラってのは人間の血を吸って生きる奴だよ」

「吸血鬼の事だ。 サイトの世界では吸血鬼をドラキュラと呼ぶ。
ただドラキュラはある人物を元に構成された架空の存在だかな」

代わりに説明すると、デルフリンガーは「おでれーた」と繰り返す。

サイトも驚いたような声を出していた。
どうやら、詳しくは知らなかったようだ。

「折角の宴だつていうのに、あんた達は何話してるのよ。
まったく、少しは楽しむとかしなさいよね？」

「楽しんでるさ、主に食べるほうでだけどな！」

「ああ。だが、料理だけでなく、酒も美味い」

美味そうに肉をほおばるサイト。

その横でソウマはグラスに注がれたワインを呑んでいた。

「それはわからないでもない。けど、ソウマは私と踊るべき」

「きゃっ!？」

びっくりして声を上げるルイズの背後から、タバサが現れる。
ソウマの近くまで歩み寄ると、タバサはそつと手を差し出す。
緊張しているのか、タバサの手が少し震えている。

ソウマはその震える手を取り、手の甲にキスをする。

「私と一曲踊って頂けますか？ レディ」

「…喜んで」

少し間を置いてタバサは言葉と共に笑顔を浮かべる。

タバサの手を握ったまま、ホールへと向かった。

「上手。踊りの経験があるの？」

「一応な、似たようなパーティーに呼ばれては無理やり踊らされていた。」

そんな事を繰り返して、気付けばある程度踊れるようになった」

タバサの軽やかなステップにソウマもあわせる。

ふとバルコニーに目を向けると、サイト達がホールへと来ていた。なにやらサイトが渋っている様子だったが、しばらくすると二人は踊りだしていた。

そして夜も更け、踊り終えたタバサ達は部屋に戻っていった。

翌朝、ソウマは学院長室へと来ていた。

「これが遠見の鏡じゃ」

目の前に置かれたのは直径約三十センチ程で楕円形の鏡だった。装飾もなく、立たせる為の棒が鏡の後ろについているだけであった。

「これで異世界と交信は出来るのか？」

「どうかのう、そもそも『遠見の鏡』は製作者が不明なんじゃ。」

『遠見の鏡』と言うのも、念じれば遠くを見通せたから勝手にワシが名付けたんじゃない」

オスマンは眉をひそめながら鏡に目をやる。

「資料があると聞いたが？」

「カッカッカ、ワシが適当に書いた説明書ならあるぞ？
百年程前に鏡を見つけ、説明書を書いたんじゃない」

「理解した。鏡をしばらく借りる。

それと書庫への立入り、閲覧の許可も頂こう」

「うむ、くれぐれも迷惑はかけんでくれ」

鏡を道具袋に入れ、オスマンに一礼して退室する。

部屋に戻って扉を開けると、未だベッドで寝ているタバサがいた。

ソウマは音を立てないように鏡を机にそつと置く。

鏡に魔力を送り込みながら、ラムザのいる場所が映るようじる。

しばらくすると《ミシミシ》と嫌な音を立てながら鏡はラムザを映し出す。

「ラムザ、聞こえるか？」

「ソ、ソウマ！？ ソウマなのか！？

今何処にいるんだ！？ それに無事なんだね！？」

鏡に映るラムザから矢継早に質問される。

「落ち着けラムザ、余り時間がない。手短に説明する。」

あの後、俺は地下に潜った。だが、強制的にハルケギニアという異世界に召喚されてな。

今は使い魔という立場で生活して、元の世界へ戻る方法を探しているが見つからない」

「ハルケギニア……聞いたこと無いな。だけど、ソウマが無事で安心したよ。」

それに戻る方法も今は無いだけで、ソウマなら見つかるだろう？
僕達は君の帰りを待ってる。と言っても異端者だから人里離れた場所だけでどね」

「仲間達にでも伝えておいてくれ。っと、そろそろ鏡が限界のようだ。」

これで連絡は終わりになるが、戻る方法については期待せず待っていてくれ」

「また会おう」

先ほどから《ミシミシ》と鈍い音を立てていた鏡に亀裂が入る。
送り込んでいた魔力を止めると、鏡は枠だけを残して粉々に砕け散ってしまった。

「今のは誰？」

背後からタバサの声が聞こえ、振り返ると寝巻き姿のタバサが目に入る。

起してしまったかと思いつつも、タバサの問いに答える。

「前の世界の戦友、英雄と呼ばれてもおかしくない男さ。」

しかし、実直が故に異端者としての烙印を押されてしまったがな」

「異端者？ 強いのか？」

「異端者の説明は必要あるまい。 こちらの世界では関係ないからな。

強さは…… そうだな、今のサイト百人が束になってもかなわない程度だ」

タバサは呆れた顔をしているが、この世界に住む住人との力の差がわかったのだろう。

もし、元の世界と自由に行き来が出来るようになれば……

「そろそろ朝食の時間、着替える」

「ああ、俺はオスマン殿のところへ謝りに行って来る。すまないが、先に行っててくれ」

「わかった。 間に合わなかったら、直接教室に来て」

「ああ、わかった」

鏡の枠だけを持って学院長室へとやって来る。 何度も扉をノックするが反応が無い。

仕方なく扉を開けると、杖を持って放心しているオスマンがいた。オスマンは呼びかける声に反応しない。 どうしたもののやらと考えていると

「ソウマ殿！ お主はなんてことをしてくれたんじゃ！？

ワシは貸す事は許可したが、壊していいとは言っておらんぞ！

恩を仇で返すとは一体どうしてくれるんじゃない?」

「すまない、まさか壊れるとは思っていなかった。

詫びと言っではなんだが、一度だけオスマン殿の言う事を聞こう」

顔を真っ赤にして捲し立てるオスマンに謝罪する。

合わせて一度だけ従う事を伝えたと、一瞬したり顔になるオスマンだった。

「ふむ? ならば、その謝罪受け入れよう。

じゃが、宝物庫および書庫では絶対に迷惑をかける出ないぞ?

宝物庫が爆発したり、書庫が燃え上がった日には、ワシはお主を殺さねばならぬ」

失言だったとわかるも、今更撤回するつもりもない。

素直に言う事を聞き、部屋から退室してタバサの待つ教室へと向かう。

教室

朝食を取り終えて教室へ着たが、ソウマは未だに来ない。
仕方なく本を読んでいると、

「おはよ、タバサ。 ソウマはどうしたのかしら?」

挨拶をしながら、隣の椅子に座るのはキュルケだった。
私は読んでいた本を閉じて、今朝の出来事を説明する。

「へー、異世界へ交信できる鏡ねえ。

私は聞いたこと無いけど、かなり希少な物なんじゃないの？」

「情報が無さ過ぎて詳しい事はわからないけど、たぶん世界に一つしかないと思う。

私も、何でも見通す鏡があるかも知れない位でしか聞いたこと無かった」

「それってかなり不味いんじゃないのかしら？
ソウマに弁償できるとは思えないし、どうするのかしら？」

「わからない、けどソウマなら大丈夫だと信じてる」

キュルケがむず痒い表情を浮かべているが、私は気にせず本を開き目を落とす。

しばらくすると《ガラツ》と言う音と共に扉が開き、ギトーが現れた。

それと同時にソウマがキュルケとは反対側の席に現れる。

「遅い」

「すまない。鏡を壊したのは不味かったな。

詫びとしてオスマンに一度だけ従う事になった。遺憾ながらな

いつも通りの声で話すソウマだが、少し怒っているように感じた。
隣に座るキュルケは「一度だけ従う」と言う言葉に反応して、少しトリップしているようだった。

「授業を始める。皆が知つての通り、私の二つ名は『疾風』だ。疾風ギトーの名の通り、私は風の使い手である」

自己紹介を始めるギトー。自分と同じ風の使い手だが、彼の事は嫌いだ。

実戦に出た事も無い人間が、如何に自分が強いかを論じているからである。

「ミス・ツエルプストー、君は最強の系統は知っているかね？」

「そうね、以前なら『火』と答えていたでしょうけど今は違いますわ」

「そうかね、では何であるか言つて見たまえ」

ギトーは確信していた、最強の系統は『風』であると。

しかし、キュルケの口から出てきた言葉は、見当違いなものであった。

「ソウマが使う水ですわ、ミスタ・ギトー」

「水だと……？ そんなものが風に勝るとも言つのかね、ミス・ツエルプストー」

「その通りですわ、ミスタ・ギトー」

キュルケは笑みを浮かべ、ギトーに言い放つ。

顔を真っ赤にするギトーは、誰が見ても怒りに震えているのがわかった。

自分の隣に座るソウマは黙っている……、いや笑っている？

「よろしい、では使い魔。私のその『水』の魔法を使うといい」

「あら、死んでも責任は取れませんわよ？」

「私は良いと言っている」

ギトーは腰に差した杖を引き抜く。

ソウマはおもむろに立ち上がると、ギトーに一言告げる。

「最強の魔法じゃないが、まあいいだろう」

「今から負けたときの言い訳かね？ 御託はいいからかかってきたまえ」

ソウマはゴーレムに使ったときのように両手を前に突き出す。

詠唱するソウマの周りだけでなく、教室全体の温度が下がっているように感じる。

『虚空の風よ、非情の手をもって人の業を裁かん。ブリザラ』

詠唱が終わり、ギトーの吐く息が白く見えた瞬間だった。

ギトーは反撃する暇も無く一瞬で氷像になっていた。

「醜い氷像の出来上がりだな」

ソウマが言い終わると、周りの生徒達が歓声を上げる。

そんな喧しい声が響く教室の扉が突然開き、コルベールが現れた。

「あいや、ミスタ・ギトー。失礼しますぞ」

教室に入ってきたコルベールは教壇にギトーではなく、氷像が置かれていた事に驚く。

その拍子に頭に乗せていたカツラがずれ、床に落ちた。

コルベールは落ちたカツラを急いで拾って頭に乗せなおすなり、咳払いをする

「ごほん、今日の授業は全て中止です。

急ですが本日、アンリエッタ姫がこの魔法学院に行幸なされます。そのため、今から歓迎式典の準備を行いますので、生徒諸君も準備をしてください」

それだけ言うと、コルベールはさっさと教室を出て行ってしまった。

生徒達は教壇で未だ凍ったままになっているギトーを見て思った。同じ教師であるギトーを助けないのだろうか。

生徒達が各自部屋に戻り、準備をし始めた頃だった。

コルベールは慌てて教室へ戻り、ギトーを氷を溶かして助けたのか……。

十三話目 疾風（後書き）

【魔法解説】

ブリザラ：氷属性の中程度の魔法。

氷柱にして攻撃したり、相手を凍らせたりとバリエーション豊富です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2428m/>

旅人・双馬

2010年11月11日08時25分発行